

# 明治初頭，日本人米国渡航者リスト解題・ 史料の補足

— 横浜発サンフランシスコ行き日本人船客リストと関連史料紹介  
及び考察（1）：横浜出航 1870 年 1 月から 6 月まで

塩 崎 智

List and Commentary of Japanese who traveled to the U.S.  
at the beginning of the Meiji era,  
in the year of 1870, Part1:  
Leaving Yokohama from January to June

Satoshi SHIOZAKI

## 要 旨

幕末維新期に渡米した日本人の渡航記録と関連情報をまとめている。今回は 1870 年 1 月—6 月に横浜を出航し、約 3 週間後、サンフランシスコに上陸した日本人に関する一次情報を採り上げ若干の考察を加えた。

主な渡航者は、岩倉具視の子息、具定と具経、とその随行者 3 人の計 5 人の一行と、米国人ユージン・ヴァン・リードが渡米を斡旋したと思われる、旧幕臣 3 人と旧桑名藩士 2 人、その他 3 人の計 8 人の一行である。

岩倉子息一行は、長崎で英語ネイティブ話者に英語の指導を受けていたため、3 人は渡米後 1 年、或いは 2 年で米国の大学に入学し、うち 2 人は大学を卒業し帰国した。また 1 人は米国から渡英し、英国の大学に入学した。

ヴァン・リードが斡旋した 8 人は、戊辰戦争絡みで日本にいられなくなり、僅かな手持ちの金で日本を脱出した。サンフランシスコなど西海岸で、学費と生活費を稼ぎながら勉強した。背水の陣が奏功したのか、旧幕臣の 3 人は渡米後 2 年目に大学に入学し、4 年で卒業した。桑名藩出身者の 2 人も、渡米後 2 年目に、大学、ビジネス専門学校に入学した。

幕末維新期の日本人米国留学生は、全般的に、渡米後はグラマー・スクールや私立アカデミーで英語のイロハを学び、大学入学に至らずに帰国するケースが多いが、この 2 グループの日本人は、大学入学率が高い。

どちらのグループも、まだ不明な点が多く、キリスト教との関わり等、興味深い点も多い。今後も調査・研究を続け、次稿では 7 月以降の船便を扱いたい。

キーワード：米国留学生，幕末維新，太平洋郵船，1870（明治 3）年

## はじめに

1867年に横浜・サンフランシスコ（以後 SF と表記）間に直行の船便が就航した。便数は年毎に増え、1870年には、ほぼ毎月1本、横浜とSFから船が出るようになった。この船便の日本人乗客リストを作成している。史料は主に、横浜とSFで発行されていた英字新聞の乗船客リストを使用している。日本人名がリストに明記されていない場合は、日米両国の一次史料を中心に情報を収集し名前の確定に努めた。本稿は1870年前半（1月～6月）の船便を採り上げた<sup>①</sup>。

今回の調査報告は、1年半ぶりに再開したニューヨーク公共図書館（New York Public Library）で2021年8月に行なったデータベース新聞記事検索の結果が基となっている。データベース名は *America's Historical Newspaper* で、キーワードに「Japanese student」「Japanese」、さらに1870年に出国渡米した日本人名等をローマ字入力（ヘボン式以外も試行）し、1870年の1月～12月の時間枠で、広告等を除いたニュース記事のみで検索をかけた。

使用史料は日米の一次史料が最優先で、補完的に二次史料を使用した。インターネットを駆使して日米の最新の研究成果を導入、紹介することも本稿の目的の一つである。また、今後の研究課題についても必要に応じて触れていきたい。

本稿の構成は次の通りである。

- I. 日本人及び、日米交流に関係の深い米国人等の船便別リスト
- II. 主な日本人渡航グループとそのメンバーに関する情報の紹介、及び今後の研究の課題
  1. 岩倉兄弟（具定、具経）とその一行（アメリカ号、1870年3月23日横浜発—4月13日SF着）
    - (1) フルベッキの期待
    - (2) 現地新聞に見る一行の渡米後の様子
    - (3) 岩倉兄弟（具定、具経）
    - (4) 折田彦市
    - (5) 服部一三
      - ・米国留学前，長崎時代
      - ・米国留学中，ラトガーズ大学入学前
      - ・ラトガーズ大学在学中
      - ・憲法への関心

- キリスト教との関わり
- (6) 山本重輔
  - レンセラー工科大学での留学生活
  - 1872年英国留学の真偽
- (7) 岩倉兄弟一行まとめ
- 2. 旧幕臣カリフォルニア留学生一行（チャイナ号，1870年6月22日横浜発—7月13日SF着）
  - (1) 田村初太郎
    - 留学までの経緯
    - SFでの生活
    - オレゴン州での留学生活
    - パシフィック大学卒業後
  - (2) 能勢栄
  - (3) 斎藤金平
- 3. 桑名藩脱走，カルフォルニア留学生一行（同上）
  - (1) 脱走の経緯
  - (2) 多藝誠輔
    - SFでの生活
    - ミシガン州立大学
  - (3) 栗原貞作
- 4. その他の3人（同上）
  - (1) タム（吉，横浜の吉蔵）
  - (2) 塚越酸素彦
  - (3) 大路元雄
- 5. 1870年6月22日出航チャイナ号乗船日本人渡航者のまとめ

### III. おわりに

当初は，日本人の米国渡航を日米交流史に位置付けるために，時代的背景の理解を深めるべく，当該期間の米国新聞に掲載された日本，日本人関連記事の分析も行う予定だったが，紙幅の都合上割愛した。日本では入手困難と思われる，今後の研究に資すると判断した史料は，巻末に全文を掲載し抄訳を付した。

日付，年号は原則として西暦を使用し，和暦の場合は漢字表記とした。米国の頻出する州，都市名であるサンフランシスコはSF，ニューヨークはNY，ニュージャージー州ニューブランズウィックは，それぞれNJ州，NBと表記した。また頻出するラトガー

ズ大学附属グラマースクール (Rutgers College Grammar School) は初出を除いては、RGS と表記した。日本語一次史料は一部、表記を読み易くした箇所がある。

## I. 日本人及び、日米交流に関係の深い米国人等の船便別リスト

乗船リストは、横浜で編集、発行されていた *Japan Weekly Mail* (以後 *JWM* と表記) に掲載された乗船客リストを主に使用した。SF での下船リストは、データベース *America's Historical Newspaper* で入手した SF の地元紙 *Daily Alta*, *Weekly Alta* を主に使用した。船便毎に、その船あるいは船客に関する背景知識の情報も必要最小限に掲載した。

### 1. アメリカ号 1870年1月2日頃横浜発—1月23日SF着<sup>(2)</sup>

●乗船リスト：日本人名無し

●下船リスト：SF 行き W. M. Robinet and servant

William. M. Robinet (ロビネット) は、長崎在住の米国人で、Robinet & Co. という会社を経営し、グラバー商会や China & Japan Trading Co. という NY 市に本社がある会社に関わっていた<sup>(3)</sup>。ロビネットは薩摩藩米国留学生が、1866年長崎を出航した際に同行している。その後、日本に戻り、このアメリカ号で再び従者を連れて帰国する。従者は日本人の可能性はあるが名前は不明<sup>(4)</sup>。

なお、*Cincinnati Daily Enquirer* (オハイオ州) 1870年1月27日の A troupe of sixteen Japanese acrobats has arrived at San Francisco. という見出しの記事によれば、日本人の軽業師一行16人がこのアメリカ号に乗ってSFに上陸した可能性が高い。しかし、steerage (船底の下級船室) の乗船客は、新聞に氏名が乗ることはほとんどないので名前は不明である。

### 2. ジャパン号 1870年1月23日横浜発—2月16日SF着

●乗船リスト：日本人名無し

●下船リスト：日本人名無し

*Hartford Daily Courant* (コネチカット州都) 1870年2月19日によると、下級船室には261人の中国人と17人のヨーロッパ人が乗っていた。同船は1万ドル以上分の日本の金貨、銀貨を運んできた。米国で新硬貨に铸造されるという。このような日米両国相互の「実益」を扱った記事は、両国の関係が徐々に深まり、米国にとってもプラスであるという印象を読者に与えただろう。

### 3. チャイナ号 1870年2月22日横浜発—3月19日SF着

- 乗船リスト：日本人名無し
- 下船リスト：日本人名無し

日本人船客とは無関係かもしれないが、船が入港した時の雰囲気伝える記事を紹介する。*Alta* (SF) 1870年3月20日によると、中国人船客870人(10人の女性を含む)が下級船室に乗船し、60ポンド分(約30キロ)のアヘンがSF当局により発見、押収された。前便と比べると3倍以上に人数が増えている。船が到着するとしばらくは、乗船してくる米国当局関係者、下船しようとする多くの中国人乗船客で、船の出入り口周辺はごった返していた。初めて渡米する日本人留学生の心情が察せられる。

### 4. アメリカ号 1870年3月23日横浜発—4月13日SF着

- 乗船リスト：日本人名無し
- 下船リスト：NY行き Yamamoto, Tatu, Osaki, J Hattori

下船リストの4人の日本人は、長州藩山本重輔(毛利, 1848-1901)、岩倉具経(変名、龍小次郎, 1853-1890)、岩倉具定(変名、旭小太郎, 1852-1910)、長州藩服部一三(1851-1929)であり、実際には薩摩藩折田彦市(1849-1920)も加わり一行は5人だった。岩倉具視子息留学一行である。*Evening Post* (NY市) 4月13日によると、このアメリカ号の乗船客は約1,200人で、そのうち1,104人が中国人だった。前便よりもさらに増えている。神奈川県沖で沈没した米国海軍オネイダ(Oneida)号の生存者も乗っていた。積み荷も船客も満載で、日・中・米間の人と物の活発な移動が読み取れる。

### 5. ジャパン号 1870年4月22日横浜発—5月13日SF着

- 乗船リスト：日本人名無し
- 下船リスト：日本人名無し

中国人船客が1,276人とかなり多い。

### 6. グレート・リパブリック号 1870年5月22日横浜発—6月14日SF着

- 乗船リスト：Dr. Vedder
- 下船リスト：新聞記事の当該頁、印刷不良につき判読不明

中国人船客は約1,300人(女性29人を含む)と相変わらず多い。

乗船リストのDr. Vedderは、Alexander Madison Vedderである。日本側の研究によると、幕末に米海軍医師として来日し、その後、長州藩主のお抱え医師、神戸病院

初代院長等を務めた。卒中を起こし、1870年春にカリフォルニアに帰国した<sup>(5)</sup>。

この船のリストには日本人渡航者の名前は無いが、日本人渡航者がいた可能性を示唆する記事がある。*Boston Daily Journal* 7月6日と*Boston Daily Advertiser* 7月7日の記事である。ボストンのセントジェイムズホテルに、日本人の official 一行が滞在中で、このうちの2、3人はボストン周辺で英語を学ぶ予定だと書かれているので、4人以上の集団である。一行が日本から来たとすれば、タイミング的には、6月14日にSFに着き、現地を1、2週間見学して大陸横断鉄道で、東部に移動したという計算になる。

渡航者は、下級船室に乗ると名前も人数も新聞には記されない。日本側の史料で1870年に米国に向けて出国した日本人のリストと照合して候補を探しているが、現状では不明である。

## 7. チャイナ号 1870年6月22日横浜発—7月13日SF着

●乗船リスト：日本人名無し

●下船リスト：For SF E. M. Van Reed, 7 Japanese

女性12人を含む中国人568人が乗船。地元SF警察の取り締まりが厳しくなったせいかわアヘンはほとんど発見されなかった。主に東部に鉄道で送られる775 packagesの茶葉が積み込まれていた。日本産か中国産かは不明である。

下船客の7人の日本人とヴァン・リード (Eugene Miller Van Reed, 1835年-1873) が同じ船で渡米しているのは偶然ではない<sup>(6)</sup>。この7人の日本人の名前は、次の2本の米国新聞記事から明らかになった。

*San Francisco Bulletin* 1870年7月14日のJAPANESE STUDENTSという見出しの記事では、7人の日本人留学生在がSFかオークランドで留学するために渡米、全員 Japanese princes の家柄の出身と書かれている。名前は、Tska Koshi, Nose, Ohgi, Kuribara, Tame, Sharibiki (印字不明), and Tamura と書かれている。*Weekly Alta California* 1870年7月23日でも、Iska koshi, Nose, Ohgi, Kuribara, Jame, Shaishiki, Tamura が、カリフォルニアでの就学を希望、と書かれている。

田村で日本側史料を調査すると、静岡藩出身の田村初太郎 (1852-1915)、同三条付属の能勢栄二郎 (1852-1895)、同斎藤金平 (1849-不明)、桑名藩出身の多藝誠輔 (山脇正勝, 1849-1905)、栗原貞作 (高木貞作, 1848-1933)、小浜藩出身塚越酸素彦 (生没年不明)、彦根藩出身大路元雄 (生没年不明)、横浜の小使、吉、俗名タム (生没年不明) の計8人が判明した<sup>(7)</sup>。Sharibiki あるいは Shaishiki は「せいすけ」で多藝ではないだろうか。斎藤金平の名前が両方のリストに欠けている。

## II. 主な渡航グループとそのメンバーに関する情報の紹介、及び今後の研究の課題

### 1. 岩倉兄弟（具定、具経）とその一行（アメリカ号：横浜発 1870 年 3 月 23 日—SF 着同年 4 月 13 日）

#### (1) フルベッキの期待

岩倉兄弟の留学に関しては先行研究が無い。まずフルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898）がフェリス（John Mason Ferris, 1825-1911）に宛てた紹介状 2 通の内容を紹介する<sup>(8)</sup>。

1870 年 3 月 19 日筆の書簡によると、5 人は有望な青年で、岩倉兄弟はフルベッキの、服部、山本、折田はヘンリー・スタウト（Henry Stout-1912）の弟子である<sup>(9)</sup>。行き先は NB。岩倉兄弟と服部は立派な青年で、それまで派遣された留学生の中では最も有望と期待されている。5 人のうち 2、3 人は英語がかなりよく話せる。*New Republic*（NJ 州都キャムデン）1870 年 7 月 2 日の記事では一行の 1 人が英語を流暢に話すと書かれている。米国生活 1 年で大学に入学することができた服部か山本だろう<sup>(10)</sup>。

1870 年 4 月 21 日筆のフルベッキ書簡には、5 人はいずれも従順で社交的で、立ち居振る舞いも端正なので、現地の米国人に好意的に受け入れられることは間違いなく、米国で良い教育を受けて帰国すれば、日本に役立つ人材となるだろう、彼らがキリスト教の信仰に導かれることを祈っている、と書かれている。帰国後、一行が社会のみならず宗教面でも活躍することにフルベッキは大きな期待を抱いている。

#### (2) 現地新聞に見る一行の渡米後の様子

SF 上陸後の一行 5 人の足跡と NB 着後の様子は、米国各地の新聞に短い記事で掲載されている。「 」は拙訳による記事の概要である。

##### 1. *Idaho Statesman*（アイダホ州ボイジャー）1870 年 4 月 26 日

「4 月 18 日に一行 5 人が鉄道でネバダ州 Elko を通った。English officers が同行し、行先は英国。」

##### 2. *NY Herald*（NY 市）1870 年 4 月 26 日 JAPANESE STUDENTS

「一行 5 人は大陸横断鉄道に乗り 4 月 24 日に NY に到着。市内セントジェイムズホテルに宿泊し、セントラルパークなどを訪問して楽しんだ。Vernon 元領事（ex Consul Vernon）が一行の面倒を見ている。留学先はプリンストン大学。」このヴァーノン元領事に関しては未調査である。

### 3. *Trenton State Gazette* (NJ 州都) 1870 年 5 月 9 日

「*The Princetonian* という新聞が 5 人の日本人はプリンストン大学に入学していない、と主張。」

### 4. *Sentinel of Freedom* (NJ 州ニューアーク) 1870 年 6 月 28 日

#### COMMENCEMENT PROPER

1869 年度ラトガーズ大学卒業式の様子を報道。当時同大学と RGS には 13 人ほどの日本人が学んでいた。They are acquiring our language very rapidly, one who has been in this country only two months conversing with entire accuracy. 日本人学生の英語学習の速さと、2 か月前に来た 1 人の学生の英語の正確さが記されている。米国に来て 2 か月あまりという表現が正確であれば、岩倉兄弟一行のうちの山本か服部である。長崎で英語ネイティブに学んだ成果だろうか。

#### (3) 岩倉兄弟 (具定 = 三男, 旭小太郎, 具経 = 四男, 龍小次郎)

2 人の留学前の英語学習歴は以下の通りである。父岩倉具視は、佐賀藩の教育を高く評価し、兄弟を佐賀に国内留学させた。この時、具視の指示で兄弟に同行したのが薩摩藩士折田彦市である。3 人は、長崎にある佐賀藩の致遠館でフルベッキに指導を受けることになった。これが 1868 年 12 月頃のことである。折田と岩倉兄弟は、この頃から共に英語を学んでいた。フルベッキはその後上京するので、長崎での指導期間は約半年程だった。

具視は、勝海舟の長男小鹿が 1867 年から NB に留学していたので、勝の意見を聞き、最後は大久保利通の後押しがあって岩倉兄弟の米国留学を決定したとも言われる<sup>(11)</sup>。

長崎で学んでいた長州藩の服部と山本がどのような経緯で一緒に留学することになったのかは不明である。折田は留学前から継続して、米国滞在中も岩倉兄弟の付添人的意識を継続して持っていたようだ<sup>(12)</sup>。

岩倉兄弟は他の 3 人と共に、NB 到着後 RGS に入学する。具定は、山本、折田とともに、Lucy Thomson 家で下宿生活を送っていた<sup>(13)</sup>。学校生活 2 年目の後半の 1872 年 3 月頃健康状態が悪化し、帰国を希望して 4 月には NB を出て SF に向かった。父具視が使節団を率いて渡米し、首都ワシントンに到着したのが 2 月 29 日である。父と入れ替わりで帰国するようなタイミングになった。

1870 年 5 月 3 日、具定が、NB で多くの日本人の面倒を見ていたヴァン・アーズデル夫人 (Van Arsdale) に書いた手紙がある<sup>(14)</sup>。それによると、NY でひどい風邪をひき、NY 市出発が予定より遅れた。大陸横断鉄道でネブラスカ州オマハまで来た頃、さらにひどい風邪を引き、相当苦しんだようだ。SF に 4 月 28 日に着いたが、5 月 1 日の横浜便はキャンセルし 16 日の便に乗る旨を伝えている。

その後、SF を出航する 3 日前の 5 月 13 日に、ラトガーズ大学のジョージ・アサートン教授 (George Washington Atherton, 1837-1906, フィリップス・アカデミー、イェール大学卒、政治学) に手紙を書いている<sup>(15)</sup>。具定は、留学期間の後半、政治学者アサートン教授の家に下宿していたことが文面から分かる。父具視の法律制度を学ぶようにという指示に応えたのだろうか。具定は手紙の中で NB を懐かしがっている。

ラトガーズ大学の学生新聞 *Targum* 1872 年 10 月号には、具定は 1872 年 4 月に、健康上の理由で RGS を退学し帰国したが、本人は 1873 年春の復学を希望している旨が書かれている<sup>(16)</sup>。その後もラトガーズ大学関係者との連絡は取っていたようで、*Targum* 1874 年 2 月号には、健康も回復し、総理大臣の父を手伝っているという記事が出ている。

弟の具経は *Targum* 1872 年 10 月号によると、勉強は順調だったようで、1872 年 6 月に RGS を卒業し、渡米後 2 年でラトガーズ大学入学試験に合格した。目下ヨーロッパ訪問中で 11 月 1 日に NB に戻ってくる予定と書かれている。具経の留学先は元来イギリスだったようで、結局ラトガーズ大学には戻らず、英国で修学を続け、1873 年に日本人学生として初めてオックスフォード大学に入学し、1878 年に帰国した。具経に関しては、イギリスも含めて留学中の情報がほぼ皆無である。

#### (4) 折田彦市 (薩摩藩、権蔵)

折田に関しては、留学中の日記 (1872 年 1 月以降) と書簡を中心にまとめた詳細な研究が複数あるので、詳細は譲り概要をまとめておく<sup>(17)</sup>。

折田は留学当初は、日本人留学生コミュニティから取ってやや距離を置いていたようだ。1870 年 9 月から RGS で学んだと思われるが、11 月には近郊のミルストーン (Millstone) に転居し、家主の牧師、オランダ改革派教会の牧師エドワード・コーウィン (Edward Corwin, 1834-1914) の個人指導を受けた<sup>(18)</sup>。1872 年 6 月には、その個人指導の成果で、College of New Jersey (現在のプリンストン大学) に合格する。現在、NY から鉄道で NB に向かうと、NB から 2 駅目がプリンストン・ジャンクション駅で、ここから 1 両編成のシャトル線に乗り換えて次の駅がプリンストンである。

試験科目は英語と数学のみで、ラテン語、ギリシャ語の古典語は省かれ「選科生」のような扱いで入学したが、3 年生からはラテン語、ギリシャ語も履修し、4 年生の 10 月には Chapel Stage という大学伝統の演説大会で、Japan, Past and Present (「日本—その過去と現在」) と題した英文スピーチ (内容不明) を披露した。1876 年 6 月には Bachelor of Arts を取得して正規に大学を卒業した。

NB が近く、薩摩藩出身ということで (留学生には薩摩藩出身者が多かった)、日本人留学生との交流は手紙のやり取りを含めて活発だったが、学年が上がるにつれて、米

国人との交流の比率が増え、現地の大学生活に順応していたことが分かる。フルベッキが期待していたキリスト教は、折田の大学生生活で精神上大きな問題となったが、後で述べる。

1876年10月に帰国した後は、文部省に出仕し、ラトガーズ大学から学監として日本に招聘されたデビッド・マレー教授（David Murray, 1830-1905）の通訳として、日本全国を回り、日本の教育の現状をつぶさに見る機会を得た。その後は、大阪専門学校、第三高等学校の校長として教育界で活躍することになる。

#### (5) 服部一三（長州藩）

服部に関しては、一次史料も含めた伝記があるので、それに在米史料の内容を追加する形で、以下に留学前後の情報をまとめる<sup>(19)</sup>。服部の留学に関しては先行研究が無いので、ここで詳細に扱いたい。

#### ・米国留学前、長崎時代

服部は16歳で四境戦争に参加し、英国留学経験のある河瀬真孝と知り合ったことがきっかけで洋行熱が高まり、薩摩藩の五代友厚の助けを借りて長崎留学が実現した。これが1867年春のことである。長崎では、後の英国領事ロバートソン（Russell B. Robertson）、後の同領事アストン（William George Aston）に師事して英語を学んだ。フルベッキと大隈重信が指導する致遠館にも数回顔を出したようだ。フルベッキが東京に去った後の後継者ヘンリー・スタウトに英語を学んだ日本人として、服部の名前も挙がっている（本稿注(9)参照）。

英語のスピーキングは上達したが、リーディングが覚束ないということで、当時長崎で医師をしていた芳川顕正に頼み、その生徒に指導してもらった。そうこうするうちに、ニューヨーク号という船が米国行きだと思い、ボーイとして乗り込む機会を得て乗ったところ、行先は米国ではなく上海だったので、失望して長崎に戻ってきたという。服部と山本重輔とは、この長崎時代に知り合い、共に苦労して貧しい書生生活を乗り切った。

その後、養父の長州藩士名和道一（緩、1838-1873）が岩倉具視と親しかったこともあり、名和の周旋で岩倉兄弟の米国留学に同行がなかった。名和は、1871年に森有礼とともに、米国にやってくる。

このように、留学前に英語ネイティブ・スピーカーとの接触機会が多かったことから、服部の英語力はスピーキングとリスニングがかなり上達していたことが分かる。また、上海渡航の件等から、フットワークの軽い、行動的な人物であることも分かる。

### ・米国留学中、ラトガーズ大学入学前

伝記の記述は、留学前に比べると、米国留学中に関する記述が大変淡泊で、NBでの学びについては、「米国に在りては専ら法律を学ばれると共に、兼ねて学制をも調査された」としか書かれていない。服部が渡米後約1年で入学したのはラトガーズ大学科学学部である。

興味深いのは、伝記に収録された『外遊日記』と題がついた日記と、服部宛ての名和、イェール大学で学んでいた会津藩出身の山川健次郎からの留学中の書簡である。

『外遊日記』は、服部が1年目のグラマースクール生活を終了し、2年目のラトガーズ大学科学学部入学が決まった後の、夏の間の旅行の様子が書かれている。同行者は養父の名和で、1871年7月17日にNBからNY州トロイへ向かい、当地の大垣藩留学生戸田氏共と松本壮一郎に会う。その後ナイアガラに足を延ばし滝の絶景を鑑賞し、カナダのモントリオールへ向かう。当地では、どういう経緯で知り合ったのか不明だが、ホルト兄弟とスティーブンソンという現地人を訪問している。

そこからロードアイランド州の有名な避暑地ニューポートに行き、8月1日にポストンに着く。当地では、岩倉使節団が滞在中で、伊藤博文、木戸孝允などと旧交を温めて、晩餐会にも参列し、8月4日に渡英する使節団一行を見送った。NBへの帰途、マサチューセッツ州アマーストに寄り、マサチューセッツ農科大学(Massachusetts Agriculture College)で学んでいた長州藩出身内藤誠太郎と原保太郎を訪ね、8月7日に帰宅、1か月弱の旅が終わった<sup>(20)</sup>。

服部は、この旅行について、「今度の旅行利を得る事少なからず。まことに愉快の夏なり。地理を知り、国情を知る。また善友を作り、その他益多し。」と感慨深げである。また、山本重輔が岩倉使節団に同行し渡欧、長州藩留学生国司健之助が米国を去ったと記している。山本の留学に関しては、史料情報の混乱があり、後述する。

### ・ラトガーズ大学在学中の様子

服部は、1871年9月にラトガーズ大学科学学部に入學する。3年で卒業できるプログラムだが、4年かけて1875年6月に卒業した。科学学部の学生数は、服部入学時は22で卒業時には14に減っている。

学生時代の様子はよく分からないが、学生新聞 *Targum* 1875年1月号を見ると、同紙の5人の associated editors の1人に名前を連ねている。現地の大学生活に馴染んでいる様子だ。Marilyn Bandera が1970年にハワイ大学に提出した修士論文には、服部の欄に、Phi Beta Kappa, Alpha Epsilon Chi Fraternity, Beta Theta Bi Fraternity と書かれている<sup>(21)</sup>。

フラタナティにはPhi Beta Kappaのように、成績優秀な学生のみが加盟を許される

ものもあれば、寮のような建物で生活を共にする学生の社交団体もある。服部がこれらのメンバーだったのであれば、彼の成績の優秀さと豊かな社交性を示していることになる。

日本の朝野新聞 1875 年 8 月 2 日には、「少年ながら銅鉄銀製造法を英語で説明」という見出しで、服部がラトガーズ大学で卒業試験に際し、6 月 21 日に行った説明について書かれている。ニュースソースは *NY Tribune*（日付無し）である。記事によると、服部は「日本産の銅鉄銀を以って物を製造する法を説き日本刀及びこれ等の金属にて製したる小（1 字不明）その外の物を示してこれを証したり」という。金属を溶かししたりする実験をしたのではなく、口頭で日本の冶金について説明したようだ。

*Trenton State Gazette*（ニュージャージー州都）1875 年 6 月 11 日の、ラトガーズ大学卒業式に関する記事では、服部が日本語で演説することになっており、その日の「目玉」となるだろう、と書かれている。この件はウエスト・バージニア州のホイーリングという地方都市の地元紙（*Wheeling Register* 1875 年 6 月 12 日）の記事でも触れられている。服部が NB で学び始めた頃、1870 年 6 月に新島襄がアマースト大学の卒業式で、日本語で演説したことも多くの米国新聞で採り上げられた。その影響だろうか。学生新聞 *Targum* 1875 年 10 月号によると、演題は「進歩の順序」（*The Order of Progress*）だった。新島も服部も日本語で演説という点がメディアの興味を引いたのかもしれないが、それゆえに、その演説の内容が残されていない。

服部が晴れの卒業式を前に招待の手紙を出した相手は、首都ワシントン駐在全権日本公使の吉田清成である<sup>(22)</sup>。米国人留学生なら家族を呼ぶところだろう。

#### ・ラトガーズ大学在学中、憲法への関心

服部の伝記では、「米国に在りては専ら法律を学ばれると共に、兼ねて学制をも調査された」と書かれている。

法律云々に関しては、本書に収録されている服部宛の留学中（1870-1875 年）の書簡内容が根拠となっていると思われる。この服部宛書簡は、日付は書いてあるが、年が不明のものが多い。いくつかの書簡の内容から、服部が、日本の *Constitutions*（憲法）について詳しく論じていることが分かる。

イェール大学留学生、会津藩出身の山川健次郎（1854-1931）が服部に 1874 年 2 月 8 日に書いた手紙には、「貴下が憲法に付き纏々とご意見を述べられているが憲法と我等は如何なる関係があるか、又、我々が憲法を如何しようと言うのであるか？ 我々と憲法は直接関係がないではないか？ 我々の論じ得られるのは憲法ではなく法令である。」と書かれている。かつてイェール大学で学びロンドンに移った鳥取藩留学生原六郎（1842-1933）も 1874 年 11 月 15 日の書簡で、「貴下は『いよいよ時が来た。即ち不合理

な政治を行われぬ様に、憲法の制定を必要とする時が来た』との御説であるが、(後略)」と書いている。

ラトガーズ大学の学生新聞 *Targum* 1873年3月号に掲載されていた匿名の英文で、*Constitutions Are Not Made, But Grow* という題の英文がある。日本の憲法について述べていて、著者は明らかに日本人である。匿名で、新聞編集部に特別なつながりのある学生が書いた可能性がある。地元 NB の新聞にも転載されている。興味深い内容で【英文史料2】(拙訳も掲載)として掲載した。山川と原が手紙で触れている服部の憲法への深い関心を考慮すると、これは服部が書いた英文である可能性が高い。服部の関心は大学での専攻の科学ではなく、社会科学にあったとすれば、科学学部は3年コースで卒業のところを4年かけて卒業したことも理解できる。この匿名記事を服部が書いたとすると、服部は、大学2年目の時点ですでに憲法にかなり興味を持っていたことになる。

#### ・キリスト教との関わり

フルベッキはフェリスへの推薦状で、一行の信仰上の成長について記していた。服部宛の書簡で最も多いのは養父の名和からの書簡で、6通、伝記に掲載されている。養父だけあって、服部が自分の精神面での状況を素直に伝えていることが間接的に分かる。名和は服部の質問に12箇条を立てて答えている (pp.192-195)。その中で、キリスト教の信仰、「新生社」とトーマス・レーク・ハリス (Thomas Lake Harris, 1823-1906) の教え、スエーデンボルグの思想等について書かれたものが6箇条を占めている。ラトガーズ大学に在籍していた畠山義成やワシントン駐在公使の森有礼 (1871年赴任) は、かつてハリスのコミュニティで生活した経験がありハリスから精神的に大きな影響を受けていた。森が渡米時に連れて来た、服部の養父の名和もハリスのコミュニティを訪れている。服部も影響無しという訳には行かなかっただろう。ラトガーズ大学というコミュニティ自体がキリスト教色濃厚だったこともあり、服部はキリスト教、ハリスの思想への態度を決めかね、名和に書簡で相談を持ち掛けたのではないか。

前出の山川発の書簡でも、山川は「若し貴下がキリスト教信者になつたれば、以上の法律の外にまだ神の掟があって、信仰と貴下の肉体は二つと成る。」と書いているので、服部はこの時点でクリスチャンではないが、相当な関心をキリスト教に対して持っていたことをうかがわせる。

山川は服部に対して、「貴下は何時も貴下の進歩した説を主張しているが貴下は学問の為に貴下の意見を変更された方が良いと思う。そうしてこれ以上若い学生の頭を刺激しないでほしい。」と書いている。服部が専攻の科学以外にも、大学生活中、学生や教授、日本人留学生と、分野を問わぬ知的交流を活発に展開していたことが想像される。

## (6) 山本重輔（毛利，長州藩）

### ・レンセラー工科大学での留学生活

山本もまた、留学中に関しては先行研究が無い。山本は当初、岩倉具定、折田とともに下宿し、RGSで1年間学んだ後、ニューヨーク州トロイにあるレンセラー工科大学（Rensselaer Polytechnic Institute）に1871年9月に入学した。前出の服部の伝記にも書かれているように、岩倉使節団が1872年夏、渡英した際に、山本は同行して英国で鉄道について学んだとされている<sup>(23)</sup>。

しかし、ウィリアム・エリオット・グリフィス（William Elliot Griffis）が1916年に発表した *The RUTGERS GRADUATES IN JAPAN (Revised and Enlarged)* には、Juisuke Yamamoto, of Yamaguchi, Cho-shiu, was prepared in the Grammar School at New Brunswick for the Scientific course, but entered the Rensselaer Polytechnic Institute at Troy, N. Y. graduating in full course. (p. 25) つまり、レンセラー工科大学を卒業した、と書かれている。

E. J. M. Roads が同大学の *Annual Register* を基に作成したリストによると、山本は1871年から1875年まで在学していたが、graduated と書かれていない<sup>(24)</sup>。日本への帰国は1875年4月となっているので、1875年6月の卒業を待たずに帰国したことになる。

20年以上前に、レンセラー工科大学を、日本人留学生の取材で訪問した際、同大学広報課から受け取った資料がある。*JAPANESE STUDENTS WHO ATTENDED RPI* に次のように書かれている。山本は、1年目の Class of 1875（1871年入学）は、6コースを落としたので、入学試験を受け直し Class of 1876 に再入学（1872年再入学）し、Division D を1872年度、同 C を1873年度に、5.0 中平均約 3.8 の成績で合格した。1874-1875年は Division B の学生リストに入っていたが、そこには進まず、理由不明で退学した。日本への帰国は1875年4月となっている。

まとめると、山本はまず RGS で1年間学び、1871年9月からレンセラー工科大学に入学したが、授業についていけず落第した。翌1872年9月に再挑戦で再入学し1873年6月には2年進級が決定、1873年9月に始まる2年生も合格進級できた。1874年9月に始まる3年目は、登録したが授業には出なかった。この1875年4月までの1年間の足跡は不明だが、帰国後の日本での就職を考え、米国の鉄道関連企業で実習に参加していた可能性はある。折田の1875年の交際相手として、山本は在米国の1人として挙げられているので米国にはいたのだろう<sup>(25)</sup>。

### ・1872年英国留学説の真偽

1872年夏の山本の動向に関しては、レンセラー工科大学があるトロイで留学中の松本壮一郎が、フェリス宛の7月24日筆の手紙で、次のように報告している<sup>(26)</sup>。

「山本は7月初旬、ニューヨーク州北部のバッファロー近くのGowanda（NY州）へ、鉄道の実地研修に出掛けた。それから1週間経つか経たないかの頃、英国から友人が山本を訪問してきたのでNYで会い、今は、山本はその友人達とともに、首都ワシントンにいる。」

岩倉使節団副使の木戸孝允の日記の記述によると、山本は1872年7月20日に首都ワシントンに木戸を訪問しているので、松本の記述は正しい<sup>(27)</sup>。

使節団本隊は、7月27日に首都ワシントンを出発、8月6日にボストンを出航し英国に向かった。服部がこの時ボストンにいて木戸と会っていることは先述した。この時、山本と英国の友人一行が、使節団に同行し渡英したかどうかに関及した史料は未見である。ちなみに山本の友人候補である河北と戸田は、寺島宗則とともに、使節団より一便早い船で渡英している。

英国渡航以降の木戸の日記を見ると、1872年11月28日に、山本が木戸を訪ねていたことが分かる<sup>(28)</sup>。そこには、山本がプロシア、ベルギー、フランスを回り、米国に帰国する旨が書かれている。山本は1872年の夏から数か月に渡り、ヨーロッパを訪問して回っていたことが明らかになった。

結論としては、山本は1872年夏に渡欧したが、イギリス長期留学はしていなかったことになる。1874年9月以降に関しては、イギリスでの鉄道実地研修の可能性は残されている。

山本の学生時代に関しては史料が発見されていない。文系大学と異なり、教室での講義以外にも、実験、現場工事実習などに参加していたことが想像される。学校と異なり、実習の場合は記録に残りにくい。帰国後は工部省鉦山寮に出仕し、1882年から鉄道関連部署で働き始めた。1901年に、碓氷峠列車逆走事故で、悲劇的な最期を遂げた。

#### (7) 岩倉兄弟一行まとめ

フルベッキは、一行5人を今までの中で最も有望な留学生とフェリスへの手紙に記していた。彼らはその期待に応えただろうか。1870年の夏休みと9月から始まる年度を終えて、1871年度9月に大学入学を果たしたのは、服部と山本の2人である。岩倉具経と折田はその1年後の1872年9月に大学に入学あるいは入学する資格を得た。岩倉具定のみが、健康を害し帰国を余儀なくされたが、大学教授の家に住み込んでいたところを見ると、彼も順調に学んでいれば1872年9月には大学入学を果たしていた可能性はある。こうしてみると、ほぼ全員が、在米1年、2年で大学入学を果たしたということになる。しかも、4人のうち服部と折田は大学を正規に卒業している。2人は米国人学生にも受け入れられ、彼等とともに充実した学生生活を送っていたようだ。この点に

については、フルベッキの期待に応えたと言って良い。

更なる分析が必要だが、留学前の長崎での英語学習歴が奏功したと考える。服部と山本は長州藩出身ということで苦勞しながらも長崎で、長期間英語ネイティブについて学ぶ環境があった。

一行5人が渡米するにあたり、フルベッキはフェリスに宛てた手紙で「願わくは神が彼等を祝福し、より聖い信仰とより高い愛に導かれんことを」と期待を込めて祈りの言葉を書いた。キリスト教の信仰についてはどうだっただろうか。

1870年の米国新聞で Japanese をキーワード検索すると、日本のカトリック信者弾圧の記事やそれに対する批判的コメントが出てくる。例えば、一行がNBに到着して2か月弱の *Daily Critic* (首都ワシントン) 6月16日に、日本でのキリスト教徒の迫害に対して、在日の外交団＝アメリカ、イギリス、フランス、プロシアが連名で抗議、日本政府はクリスチャンの日本政府への不服従を懸念しているようだ、といった内容の記事が掲載された。当時の米国では、電信のおかげで、1紙の記事が全米各地の新聞に転載されたので、その影響は1都市に留まらない。岩倉兄弟一行を始めとしたNB在住の日本人留学生も、この話題には無関係、無関心ではいらなかっただろう。

ラトガーズ大学もRGSもキリスト教の雰囲気が濃厚な環境だった。牧師コーウィンのもとで2年間に渡り直接個人指導を受けた折田は、プリンストン大学でも日々、キリスト教に触れ真剣に悩み続け、ついに卒業直前に洗礼を受けた。他の4人の信仰を明確に証明する史料は無い。少なくとも、岩倉兄弟に関しては、在米時はまだ明治政府がキリスト教徒を迫害していた状況なので、父具視の立場上、信仰を受け入れたとしても、それを公表するわけにはいかなかっただろう。服部は、養父名和の書簡から察するに、キリスト教の信仰に関しては精神的葛藤があったようだ。ハリスが主催した「新生社」との関わりも調査する必要がある。

*New Republic* (NJ州都カムデン) 1870年7月2日の紙面に掲載された、RGSとラトガーズ大学で学んでいた日本人留学生のインタビュー記事がある。見出しはTHE JAPANESE IN COLLEGEとなっている。記者に単独で対応しているのは、薩摩藩留学生の畠山義成(変名、杉浦弘蔵、1842-1876)である。

NBで学んでいる日本人留学生に関しては、地の利を活かした、地元NJの新聞記事の内容が詳細である。かなりくだけた内容の記事であるが、畠山は、キリスト教への改宗について苦しそうに次のように答えている。

Two have been converted to Christianity, one to Methodism, and the other Dutch Reform belief. The reporter asked Mr. Soogiwoora, what the Imperial Government say to this. Soogiwoora hesitated, and finally replied that it said

nothing.

“Does your Government know of it?” asked the reporter.

“Well,” said Soogiwoora at last, “not a quite, not a quite.”

この洗礼を受けた二人は、メソジストの吉田清成とオランダ改革派の畠山自身である。畠山としては、自らの信仰について日本政府が知っているかどうかは、お茶を濁した感じで答えている。

ちなみに、他の RGS の日本人学生 12 人のキリスト教に対する姿勢は次のように書かれている。

As for the twelve other Japanese youths they neither approve nor disapprove of the conversion. They are reading and meditating themselves, and have not yet made up their minds whether they shall remain firm to their old faith or not.

日本人留学生達は、明治政府の指示通りにキリスト教を明確に拒否したのではなく、各自葛藤していたことが分かる。

米国で洗礼を受けた日本人は帰国すると、それがキリスト教解禁後でも、自らの信仰を明らかにしなかった場合が多い。フルベッキの期待は、この意味では、裏切られたことになるかもしれない。しかし 5 人が少なくとも 1 年間は生活した NB は、学校も下宿もキリスト教の信仰が深いコミュニティで、reading and meditating と書かれているように精神的、思想的に、どの留学生も大なり小なりキリスト教の影響を受けたはずだ。彼等の帰国後の日本での活動において、この米国生活が精神的、知的に与えた影響がどのように反映されたかを知ることは、自分の幕末維新日本人米国留学生研究の最終ゴールの一つである。

## 2. 旧幕臣カリフォルニア留学生一行（チャイナ号：1870 年 6 月 22 日横浜発 —7 月 13 日 SF 着）

この船に乗っていた 8 人の日本人は、敢えて命名するならばヴァン・リード率いるカリフォルニア留学生ということになる。ヴァン・リードは日本の新聞等で米国渡航の斡旋の宣伝をしていた。それに応募したのが、この 8 人という可能性が高い。一行をグループ分けすると、田村、能勢、斎藤の旧幕臣組、栗原と多藝の桑名藩士組、そしてその他 3 人ということになる。ここでは、まず旧幕臣組について情報をまとめておく。

## (1) 田村初太郎

### ・留学までの経緯

一行8人の中で、最も情報が豊富である<sup>(29)</sup>。その内容に依拠して以下情報をまとめておく。

田村は旧幕臣で、1864年に開成所で英語を学び、翌年2月には助手、その2年後には英学教授手伝となる。明治に入り、父が浜松添奉行となり一家で転居。翌年静岡の名村五八郎私塾に入り、静岡英語学問所英学四等教授、その後、三等教授となった。1867年春、東京に出て大学南校に入学したが、満足せず海外留学の道を模索していた。留学前から、相当な英語学習歴がある。江戸時代は読み書き中心、維新後の大学南校ではネイティブの指導を受けていた可能性が高い。

1870年6月22日、横浜港から米国へ渡り、7月13日SFに到着した。田村の留学は完全な私費で、渡航・留学費用の捻出は以下の記述が詳しい。

「旅費として浜松の父に三百両の用立てを頼んだが、急のこととて間に合わぬとの返事があり、やむを得ず持物を売って百両作り、洋銀メキシコドル九十三ドルに換え、五十ドルを船賃に払った。」<sup>(30)</sup>

つまり、SFに到着した時には手元に43ドルしかない。幕末維新期の留学生は、ほぼ全員が国費、公費、私費で年間600から1,000ドルの予算で渡来している。田村の場合は現地で働かないことには米国の学校にも通えない。岩倉兄弟一行とは違った、捨て身の留学だった。

### ・SFでの生活

SFの発展ぶりに田村は驚くが、日曜の閑散とした街中で響き渡る鐘の音に惹かれたのか、教会に足を踏み入れ、日曜学校にも顔を出し、そこでパーマーという米国人と知り合い、聖書の内容を教えてもらう。毎週のように教会に通って牧師の説教を聞いたが、疑念があり、信仰心を持つには至らなかった。牧師の説教の内容はある程度は理解できたようだ。

ホームステイ先は、パーマーの母親の家で、8月6日から3週間ほど下男奉公をして暮らす。「衣服泥土に浴し鼻より出血し先苦万苦紙上に尽し難し」だった。3年前、同じSFで、高橋是清が、ヴァン・リードの父親の家で下男奉公し、学校にも行かせてもらえず、食事も粗末で、家事労働をさせられた例が想起される<sup>(31)</sup>。この3週間のホームステイ労働の賃金は、寝床・賄い付きで合計5ドルだった。

### ・オレゴン州での留学生活

2か月経った9月2日にSFを出てオレゴン州ポートランドに向かい、9月6日に到着、8日にパシフィック大学（Pacific University）の中学校（grammar school）に入学した。

同大学は、1849年に設立された、現地の孤児を教育するための学校が前身で、組合教会の牧師等が中心となって作ったキリスト教の雰囲気が濃厚の大学である。1854年に大学教育を始め、1863年に最初の学士学位取得者を出した。田村は日曜学校関係者に紹介されたのだろう。

田村は学費、生活費を稼ぐために、ここでも下男生活を強いられる。今度はS. H. マーシュというグラマースクールの校長の家に住み込む。「割烹、鋸挽き、薪割り、牛乳絞り」で心身の疲労も激しかったが、朝から晩まで週末も夏休みも雑用と読書の毎日だった。2か月前に渡米しNBで学んだ岩倉兄弟一行の留学生活とは雲泥の差である。

英語に関しては、言葉がうまく通じず子供達から揶揄われることもあったようで、教会の説教は理解できても、日常生活会話レベルの英語には苦勞したようだ。途中から、同船、旧幕臣出身仲間の能勢栄と斎藤金平も下男仲間に加わった。

グラマースクールでは、「第四読本」と「法書」の研究を始めたという。「第四読本」はグラマースクールでよく使われたReaderと呼ばれる教科書で、Firstから始まりFifthまでである。Fourthから始まったということは、英語を読む力はかなりあったということになる。

グラマースクールに入学した年の冬、1871年12月に岩倉使節団がSFに到着した。一行を田村等は訪問し、「大使付きの栗原安次郎から二百両を頂き、また勝安房の周旋で脱走罪を許され官費生として扱われることになった」という<sup>(32)</sup>。この「脱走」については後述する。

グラマースクールは2年間で卒業し、1872年6月にパシフィック大学に入学した。岩倉一行の服部、山本からは1年遅れで折田と同じペースで大学入学ということになる。グラマースクールか大学1年の時に、努力の甲斐あってか、ポートランドの「ハルグレン」という米国人が田村と斎藤に年額30ドルを2年間援助してくれることになった。

田村は、官費生となっても、将来のために下男奉公を続けた。この蓄えのおかげで、1873年に日本政府の留学生一斉帰国命令が出た時も自費で修学を続けることができた。

他の日本人留学生は大学に進学しても、学ぶ側のままだったが、田村は大学で2年間、学生に化学を講義することになった。できたばかりの小規模な大学だから可能だったのだろうが、田村の日本での教員歴も奏功したと考えられる。今でいうTeaching Assistantだった可能性もある。

田村は、大学時代、演説に力を入れ、2年生で全校の演説会に参加し、3日目には選

ばれて演説者となり、4年目には「上等一級生徒として毎期の終わりに演説をした」。大学在学中、課外も含めると、写真、花火、音楽等を研究し、記帳法、フランス語、分析化学等を学んだ。リベラルアーツの大学で特に専攻は無かったようだ。夏休み中は、森林で材木のアルバイトをして体力と財力を養った。

1876年6月7日の卒業式では、選ばれて演説をしたが、演題は不明である。その後、7月28日に大陸横断鉄道で初めて東部に向かい、8月5日にフィラデルフィアに到着し、当時開催中だった建国百年記念万国博覧会を見学した。日本も参加し、日本から関係者が来ていたので、彼等と会っていただろう。

#### ・パシフィック大学卒業後

卒業後、メリーランド州のバルチモア郊外の町エリカット (Ellicott) にある、「セント・クレメンツ・ホール」という学校の教授として雇用された。これは1866年に設立された St. Mary's College ではないだろうか。この学校は1882年以前、つまり田村が教壇に立った1876年頃は、Mount Saint Clemens と呼ばれていた、カトリックのレデンプトール会が設立した神学校だった<sup>(33)</sup>。

1877年3月には同校を去ったので、教歴は1年弱ということになる。その2日後にオハイオ州オバリンのオバリン神学校 (The Oberlin Theological Seminary) に入学し、5月に第二組合教会で洗礼を受けた。同校を選んだのは、1876年12月に首都ワシントンを訪れた際、懇意になった E. W. メトロフの妻の薦めだった。折田がプリンストン大学で卒業直前に洗礼を受けてから、ほぼ1年後ということになる。キリスト教と早くから接しながら、ここまで洗礼に時間がかかった理由は何だったのか。ちなみに、田村と折田はフィラデルフィア万国博覧会で出会っている可能性がある。

1877年の夏は、オハイオ州内の町から遠く離れたニューヨーク州ロチェスターまで、教会を訪問し演説して回った。大学時代に鍛えた演説術の賜物だったかもしれない。

1878年2月末、田村は父病死という知らせを日本から受け、苦渋の末決断し、神学校卒業を前に、4月1日 SF を出航して帰国した。

帰国後は、官立大阪英語学校の教員となったのを振り出しに、大阪梅花女学校校長、第三高等中学校、京都私立平安女学院等で教壇に立った。ちなみに田村が就職した大阪英語学校の当時の校長、高良二は徳島藩留学生で、田村の後の便で渡米した1870年渡米留学組の1人であり、その後任は折田である。1870年留学組3人が関わっていたことになる。

大阪英語学校では英語、物理、ラテン語を講義している。その後、第三高等学校、京都帝国大学の教員となり、1913年には、京都帝国大学文科大学でラテン語を講義した。田村の蔵書には、ラテン語、古代ギリシャ語、ヘブライ語があり、日本における西洋古

典語学の草分けとも言える存在だったようだ<sup>(34)</sup>。

## (2) 能勢 栄

旧幕臣の家の出身で、江戸で生まれた。留学までの経緯は不明。田村関連史料には、「三条付属」と書いてある<sup>(35)</sup>。三条の留学に随行という意味に取れるが、三条という渡航者は同船していない。SF 上陸後の経緯は不明だが、田村とは別行動を取り、その後、パシフィック大学附属グラマースクールの校長宅の下男に、斎藤金平とともに加わった。能勢もまた私費留学生で十分な学資もなく渡米したのでろう。

1870 年度にグラマースクールに入学後、田村と同じ 1872 年にパシフィック大学入学、1876 年に同大学を卒業して 9 月に帰国した。

在学中の詳しい情報は無いが、『幕末維新海外渡航者人物情報事典』では、専攻分野「理学」と記されている。帰国後は、岡山県、長野県、福島県の師範学校教員、中学校長等を歴任した。1877 年に『動物生理学』を翻訳出版している。1886 年には森有礼文部大臣の要請で、文部省書記官を務め、中学校と師範学校の教科書『倫理書』の編纂に関わった。森暗殺後は、文筆業、翻訳に専念し、教育学者として指導的役割を果たしたとされている<sup>(36)</sup>。

## (3) 斎藤金平

静岡出身ということで旧幕臣の家出身。能勢とともに、パシフィック大学グラマースクールの校長宅の下男となり、田村とともに、ポートランドの「ハルグレン」という米国人から年額 30 ドルを 2 年間出してもらった。1876 年同大学卒業後、1877 年にミシガン大学に入学し、法学部で学び 1878 年に学位を得て卒業後、帰国した<sup>(37)</sup>。帰国後は、広島中学校教員となり、後に函館始審裁判所長、大審院判事を務めた。

1876 年 6 月 13 日筆 SF 領事高木三郎から駐米公使吉田清成への書簡で、斎藤、能勢、田村の 3 人がパシフィック大学を 6 月に卒業したが、さらに 3 年間米国東部へ留学したいと高木のところにやってきた旨を伝えている。3 人とも勤労学生で相当苦勞し感心なので、話を聞いてやってほしい、と高木は吉田に伝えた<sup>(38)</sup>。吉田の彼等への対応は定かではないが、田村と斎藤は東部と中西部で留学を続けることができた。

## 3. 桑名藩脱走、カリフォルニア留学生一行

### (1) 脱走の経緯

桑名藩出身の多藝と栗原の二人は諸史料によると、戊辰戦争で新選組の一員として幕府側で戦い、今回ヴァン・リードの小使いとして渡米したことが分かった。二人とも帰国後の日本での動向の詳細が分かっている<sup>(39)</sup>。

まず、多藝、栗原とヴァン・リードとの関係については、ワカマツ・コロニー研究者が、「於開港場免状相渡候航海人銘鑑」で次の史料を発見している<sup>(40)</sup>。

- ・貞作 出身地：横浜太田町三丁目平松ヤ / 身分・職業：寅吉寄子 / 渡航理由：米商ウェンリート小使ニ被雇 / 発行日一八七〇年五月二十二日 / 返納年月：一八七三年二月十日帰朝 / 年齢：22 / 免状渡航名：神奈川
- ・誠助 出身地：横浜太田町三丁目平松ヤ / 身分・職業：貞作弟 / 渡航理由：米商ウェンリート小使ニ被雇 / 発行日一八七〇年五月二十二日 / 返納年月：一八七四年十一月二十四日帰朝 / 年齢：24 / 免状渡航名：神奈川

貞作は、栗原貞作＝高木貞作で、誠輔は、多藝誠輔＝山脇正勝である。2人は出身地や身分（苗字無しの町民）をほぼ完全に偽り、ヴァン・リードの小使いの兄弟として出国したことが分かる。明治も3年になるというのに、密かに渡米するには理由がある。少し長いが、桑名市HPの栗原＝高木に関する記述を以下に引用する<sup>(41)</sup>。

「慶応4年に21歳（数え年）でした。この年の閏4月3日に、桑名藩家老吉村権左衛門宣範を越後柏崎の路上で暗殺したといわれています。もう一人の暗殺者であった山脇隼太郎とともに暗殺後に姿を隠しました。高木は神戸四郎、山脇は大河内太郎と変名し、旧幕府軍の衝鋒（しょうほう）隊に潜り込み、会津若松で桑名藩軍に合流しましたが、その後、桑名藩軍が庄内で降伏したので、彼らも降伏しました。そして桑名藩軍が桑名へ護送されることになったのですが、彼ら二人が桑名へ戻れば吉村家から仇討ちにあうかもしれないと考えられました。そのため二人は僧侶の姿をして、名前も高木が成徳、山脇が成光とまた変名し、箱館（現在の函館）にいる旧桑名藩主松平定敬を訪ねていきました。庄内を出るときに高木は手紙と刀、髪の毛を服部半蔵に預けました。

ところが彼らが箱館に着いたときには、すでに松平定敬は箱館を出た後でした。その後二人は新選組に属して、最後の五稜郭の戦いに参戦し、敗北したのです。明治2年11月に東京へ船で護送されて、身柄は桑名藩に引き渡されました。その後のことは明確ではありませんが、二人とも桑名には戻らず、明治3年にアメリカへ行きました。高木はいったん帰国して、明治5年に大蔵省派遣留学生として、再びアメリカへ行きました。」

これだけの「前科」があれば、明治政府からも桑名藩からも目を付けられ八方ふさがりの状況となり、出国するしか途は無かったということになる。

明治3年になっても日本で隠れ回って暮らさなければならなかった旧佐幕藩士に「米国」という活路を開いたヴァン・リードの貢献も見えてくる<sup>(42)</sup>。ヴァン・リードは、一八六七年七月、十月、十一月、一八六八年二月、十二月、一八六九年十二月に、『萬國新聞』に日本語で、「米国へ学問修業交易又ハ見物遊歴」希望の者を世話するという広告を出していた。

多藝、栗原のSF到着直後の足跡は不明である。反政府という同じ立場だった田村、能勢、斎藤の旧幕臣3人とは別行動を取ったようだ。

## (2) 多藝誠輔

### ・SFでの生活

多藝の名前が最初に史料に登場するのは、名古屋藩留学生の永井久一郎の日記、1871年9月12日の記述である。SF上陸後1年2か月が経過している。この日、永井一行が宿泊したSFのグランドホテルに、多くの在留日本人が訪ねて来た。「彦根藩二名、東京府商社三名、多芸誠輔等」がその顔ぶれである<sup>(43)</sup>。翌13日の夜、「多芸誠輔・武藤某・安藤・山内・佐藤等」と中国料理店に行き、麵を食べた。多藝の一行訪問の目的は書かれていない。

その4か月後、1872年1月15日に岩倉使節団がSFに到着し長期滞在していた時、使節団に同行した元福岡藩主黒田長知のところに、多藝と会津藩出身西川友喜が訪ねて来たことが、黒田随員の団琢磨の伝記に書かれている<sup>(44)</sup>。西川と多藝は、黒田一行をSFで案内したようで、西川は黒田の通訳として雇われ、ボストンと一緒に滞在することになる。多藝はSFに残ったようだ。

更にその3か月後、1872年4月18日SFに入港したアメリカ号（横浜発3月26日）には、大蔵省派遣吉田清成一行5人が乗り込んでいた<sup>(45)</sup>。吉田の米国出張の目的の一つに外債募集があり、吉田はSFで早速交渉を開始した。この時、吉田を訪ねてきた2人の日本人について、大隈重信と井上馨宛ての文書でSFに関する諸情報を伝える中で、次のように吉田は記している<sup>(46)</sup>。

「多藝誠輔元桑名藩士、石澤源四郎元斗南藩士、両人は二年前より当地へ罷り越し候而、實学修行之望も有之人物に有之候。且此程同行の内には通辯十分に出来候者無之、彼是差支候旁、右兩人至極適當之者と見込候間「ニウヨルク」迄召連、猶經驗之上に而愈宜敷候はば、金銀溶解術實地研究為致奉存候。」

桑名藩出身の多藝と会津藩出身の石澤という2人の日本人が2年前からSFで修学していて、吉田一行には十分な通訳がないので、2人をNYまで連れて行き、そこで、

おそらく貨幣鑄造のための実地研修させたい旨伝えている。吉田はSFから首都ワシントンに移動し、1872年6月には渡英する。多藝と石澤が、この後、吉田一行に同行したかどうか、どこまで同行したかは未調査である。通訳として雇われたとしても、吉田一行の渡英までの2か月間ほどのことだっただろう<sup>(47)</sup>。

多藝や西川、石澤が、このように、日本人一行がSFに着くと訪問していたのは、生活費稼ぎと自分の売り込みが目的だったのだろう。SFを案内し通訳を担当することにより、某かの御礼をもらい、西川のように長期間に渡る仕事も貰える可能性もある<sup>(48)</sup>。案内してもらった方も、ただでお世話になる訳にはいかない。SFで自活していく必死さがうかがえる。

### ・ミシガン州立大学

1872年9月、多藝は、SAISKE TAGAIという名前でミシガン州アナーバーにある州立ミシガン大学に入学し、1874年まで在籍していたことが分かっている<sup>(49)</sup>。卒業はしていない。学費が安かった同大学では、日本人留学生がこの後、外山正一、同船していた斎藤金平など続々と入学してくる。多藝は日本人学生第1号で渡米2年後の大学入学である。

*Salem Register* (マサチューセッツ州) 1872年10月14日の記事に、在ミシガン州アナーバー特派員が、市内のUnion High Schoolで、bright looking Japanese youths (聡明そうな日本人の若者達) が学んでいると書いている。多藝がミシガン大学に入学した時に、同じ町の高校で学んでいた日本人留学生が複数いたことが分かる。同大学で学んだ日本人で最も有名な人物は外山正一(1848-1900)である。彼は1873年に同大学に入学し、入学前に市内の高校で学んでいたため、外山はこの1人だったのだろう。

多藝の帰国は1874年11月となっているので、ミシガン大学を卒業せずに帰国したことになる。帰国後は、山脇と名乗り、1875年に三菱に翻訳係として入社したのを皮切りに、三菱所有の海外航路、高島炭鉱、長崎造船所など、三菱内部で出世を遂げていく。

### (3) 栗原貞作

栗原については、拙稿で既に採り上げている<sup>(50)</sup>。1872年4月に多藝が吉田清成を訪問した時、この吉田一行に参加していたのが栗原である。栗原は単独で帰国し、吉田一行の一員として再渡米した。この帰国の目的は多藝と自分の学費の工面ということも考えられる。

#### 4. その他の3人

##### (1) 横浜の小使、吉、俗名タム

1870年11月17日にSFに着いたチャイナ号には、大垣藩出身松本壮一郎等が乗船していた。松本の手記によると、SFでは、佐倉藩出身佐藤百太郎、徳島藩出身森源蔵、横浜の吉蔵が会いに来ている<sup>(51)</sup>。この吉蔵が、吉＝タムという可能性はある。江戸の儒者、佐藤一斎の孫の河田栄之助も当時SFにいたようで、松本に会いに来ている。松本の手記によると、SFには7人の日本人がいた。当時のSF在住日本人に関しては、関連史料を収集中であり、別稿で扱いたい。小浜藩出身塚越と彦根藩出身大路も、この7人に入っていたかもしれない。

##### (2) 塚越酸素彦（生没年不明）

小浜藩出身。唯一の情報は、彦根藩主井伊直憲一行が1872年12月に渡米した際の『井伊直憲洋行日誌』の記述である<sup>(52)</sup>。1873年3月19日、井伊一行がボストンからニューヨークに戻ってきた時、一行はセントニコラスホテルで「塚越并由良」ともう1人の日本人宿泊客を訪ねている。塚越に関する記述はこれ以外にない。由良は紀州藩出身の由良守応で、当時、勧農寮から派遣され米国の牧畜の実態を見学して回っていた。この塚越が小浜藩出身の塚越と同一人物であれば、英語が不自由な由良の通訳として一緒に行動していた可能性がある。

##### (3) 大路元雄（生没年不明）

彦根藩出身。史料未発見。永井久一郎等名古屋藩留学生が、1871年9月12日にSFに上陸しグランドホテルに宿泊していたところ、多くの日本人が訪問してきた。そのうちの2人は、名前は記されていないが、「彦根藩二名」と書かれている<sup>(53)</sup>。この1人が大路ではないだろうか。

彦根藩が米国に送り出した留学生については、鈴木栄樹は、鈴木貫一と武藤精一を挙げている<sup>(54)</sup>。鈴木貫一は、明治元年（1868年）出国後SFで英語を学び、明治二年に帰国した。武藤は実業留学で、やはり明治元年に渡米し、ニューヨーク州中部のユティカ（Utica）で「羅紗製造機械場」で技術伝習を受けていた。大路には触れていない。

#### 5. 1870年6月22日出航チャイナ号乗船日本人渡航者のまとめ

これまで、幕末維新の米国日本人留学生研究は、NBやボストン、ブルックリン、ニューヘイブン等、米国北東部で学んだ日本人留学生にほぼ限られていた。その理由は、フルベッキーフェリスのオランダ改革派教会関係者経由の留学が多く、史料も豊富で研究対

象としてアクセスしやすかったことが挙げられる。しかし、今回の調査で、SF、オレゴン州やミシガン州など、米国西部、中西部で学んでいた日本人留学生に関する情報が増えてきていることが分かる。

この8人については、田村と多藝以外は、留学に関しては、ほとんど先行研究が無い。ワカマツ・コロニーの研究者達からの更なるアプローチを含めて、関連分野研究者の協力により、史実を明らかにしていく必要がある。実際、幕末維新期にSFで学んでいた日本人留学生はかなりいたようで、まずはこの点から調査を開始したい<sup>(55)</sup>。

田村初太郎関連史料によると、岩倉使節団がSFに到着して一行に会った時に「勝安房の周旋で脱走罪を許され」という。また、松本壮一郎の留学中の手記によれば、「脱走の姿にてミチガン当等にも留学せる本邦人あり」と恐らく多藝のことが書かれている。桑名藩の多藝、栗原の脱走は明らかだが、旧幕臣の田村、能勢、斎藤も「脱走歴」があったとすると、何のことだったのか。彼らも何らかの幕府側の隊に属し、新政府の目から逃れ続けなければならぬ存在だったのだろうか。小浜藩は鳥羽伏見の戦いでは幕府側で戦った。彦根藩は、薩長側で戦ったが、譜代藩であり、暗殺された大老井伊直弼の出身の藩であったことから、心情的には佐幕の藩士も少なくなかった。

彼らに米国という究極の脱出先を提供したのがヴァン・リードだった。一行8人は藁にもすがる思いで、ヴァン・リードになけなしの金を払ってとにかくSFに渡ったのではないかと。僅かな資金の私費留学なので、物価が高く、大陸横断鉄道の費用もかかる東部に行かず、SFに留まり、住み込み労働などをしながら勉学を続けた。

一行8人のうち、田村、能勢、斎藤は大学卒業、多藝も大学で学び、栗原は専門学校で実業を身に着ける等、立派な教育成果を挙げている。日本に戻るに帰れないという状況、生活費、授業料を自費で捻出しなければならないという厳しい環境が、彼らのディシプリンを刺激し続け、学業成績にもそれが反映されていたのではないだろうか。パシフィック大学もラトガーズ大学と同じように、キリスト教の雰囲気濃厚な小規模な大学だった。SFの教会の世話にもなったことだろう。田村以外のカリフォルニア留学生とキリスト教との関わりは、今後の研究課題の一つである。

また、折田と田村の例に見るように、全く異なる留學生生活を送っていた、1870年留学組の東（ニュージャージー州）西（カリフォルニア州、オレゴン州）の交流（帰国後も含めて）も興味深い研究テーマである。

## おわりに

1870年には、1868、1869年と比べると、日本人留学生も含めて、米国新聞における日本・日本人に関する記事の掲載がかなり増えてきた印象を受ける。日本から来た軽業

師の一行は複数のグループが全米を巡業し、彼等の紹介や実際に行われたパフォーマンスに関する記事が、年間を通して全米各地の新聞に載っている。

1月24日には、米国海軍船オネイダ（Oneida）号が、現在の神奈川県観音崎沖で、英国船と衝突し沈没。この事件や生存者の体験談の影響のせいか、米国の新聞では1870年前半は日本がよく取り上げられた。日本に旅行、任務で長期滞在した西洋人の体験談や在日本特派員発の記事も、読者の興味を引くのか、掲載されることが少なくなかった。

日本と米国とのビジネスに関する記事も多い。日本から欧米に輸出された、茶葉や繭、蚕紙はよく新聞で採り上げられた。*San Francisco Bulletin* 1870年4月6日の紙面には、*American Enterprise in Japan* という見出しの記事が、日本における鉄道や電信の敷設といった米国のビジネスチャンスについて報じている。明治も3年になると日本の国情も落ち着きを見せ始め、特に太平洋岸のサンフランシスコ等は、ビジネス絡みで日本に熱い視線を送り始めていた。

このような日本への関心の高まりを背景に、全米各地の日本人留学生の情報も増えてきている印象を受ける。記事の転載も多い。日本と中国の混同、日本でのキリスト教徒に対する迫害や、幕末、維新初期の攘夷的雰囲気之余韻がまだ濃厚に残されていたこの時期、次々に船でやって来る礼儀正しく、*prince* と呼ばれた日本人の渡航者達は、日本に対するイメージの改善を促進していたように感じられる。

これまでの調査の結果から、1869年末から日本人の出国ラッシュを予想していた。1870年の1月から6月までの前半は、今回姓名が判明した日本人の出国は、岩倉兄弟一行（3月23日出航）と旧幕臣・桑名藩出身者とその他（6月22日出航）のみである。様相が一変するのは7月出航以降であるが、これは次稿に譲りたい。

意外だったのは、1870年渡航集団は、1873年の文部省による留学生一斉帰国召喚を乗り越えて、多くの大学卒業生を輩出していることである。従来、維新初頭の日本人米国留学生は、グラマースクールや私立アカデミーで英語を学習する段階で帰国し、大学入学まで到達したケース、さらに大学卒業まで至ったケースは稀というイメージがあった。服部、折田、田村、斎藤、能勢は大学を卒業し、山本、多藝も大学に進学し複数年学んでいる。

この成功要因の一つとして、日本での長期間に渡る英語学習が挙げられるだろう。服部、山本は、米国到着後1年で大学に入学し、岩倉具経、折田は2年で大学入学資格を得ている。彼らは長崎で、フルベッキ等から英語を1年かそれ以上学んでいた。田村も早くから英語を読み・書き中心で学び、留学前から長期間に渡る英語指導歴もあった。

幕末維新时期の日本人留学生は、米国で初めて英語に触れアルファベットから学んだという印象があるが、田村は5段階のリーダーの上から2番目を読むぐらいの英語力を既

に身に着けていた。

今後は、長崎、横浜、慶應義塾等、日本で英語教育を受けて留学した日本人の、日本での英語学習の内容と、留学先での英語力、一般学力の伸びとその速度等の関係も調査する必要がある。

カリフォルニア留学組は、田村以外は日本での英語学習歴は無さそうだが、米国で生きていくしかない、という必死の覚悟が成功要因だったかもしれない。能勢、斎藤、多藝も渡米後2年で大学に入学している。

キリスト教との関係については、彼等の内面に関するところで、時代的制約もあり、情報は限られているが、ラトガーズ大学、プリンストン大学、パシフィック大学のいずれもキリスト教的雰囲気が濃厚な環境だったので、洗礼は受けなかったとしても、価値観、人生観、社会観等で、相当な影響を受けていたと思われる。名和・服部書簡や、畠山のインタビューは、彼等の内面を伝える重要な史料である。今後も、米国人宛ての個人書簡等の内容を精査していきたい。

この米国渡航者リスト作成は、当初の単純な「リスト作成」の域を超えて、調査内容が拡大する一方で、焦点がぼやけているのでは、との指摘も受けている。確かにその通りであるが、次から次へと枝葉のように分かれて現れる更なる研究テーマの出現を無視できない、というのが本音である。しかし、自分個人の非力では到底対処できるものではない。拙論を読まれた方に関心を持っていただき、共に研究を進めていただければ、という思いもあり、執筆を進めている。

次稿では、1870年代後半（7月以降の出発）を扱うが、さらに日本人渡航者が増え、発表もさらに2回に渡る予定である。また、1870年の渡航者の研究で、1867-1869年の渡航者に関する新たな情報も入手できたので、こちらに関してもいずれ修正した結果をまとめて発表したい。

#### 《注》

(1) これまでの調査結果は、以下の拙稿参照。なお、1870年分の調査報告は、本稿も含めて3回に分けて発表する予定である。

- ・塩崎智 (2020) 「1872年3月26日横浜発サンフランシスコ行き、アメリカ号日本渡航者の調査——先行研究発表後四半世紀の関連研究成果のまとめ——」
- ・同 (2021) 「横浜発サンフランシスコ行直行便の日本人船客リスト（1868年と1869年）——日米両史料を活用した試み——」

*Japan Weekly Mail*（以後 *JWM* と表記）の船舶情報欄と太平洋郵船の就航に関しては、伊藤久子「解説」が基本的情報を提供している。本研究のきっかけとなった西岡淑雄の以下2本の研究も重要である。

- ・西岡淑雄 (1992) 「太平洋郵船と英学史」
- ・同 (1993) 「明治五年二月十八日横浜発のアメリカ号で渡航した留学生たち」

- (2) この船便のみ横浜出航日が不明。SF 着の3週間前の日付を出航日とした。1869年12月末出航の可能性が高いが、前稿、塩崎(2021)で扱わなかったため、本稿で採り上げた。
- (3) 吉原重和「新島襄と吉原重俊(大原令之助)の交流」pp.5-6。
- (4) 例えば、ヘボンが1868年に米国に一時帰国した際、長吉と三吉という横浜在住の日本人が「小使」として免状を発行されている。免状発行者リストは、海外移住150周年研究プロジェクト編『遙かなる「ワカマツ・コロニー——トランスパシフィックな移動と記憶の形成』の巻末(資料12-16, pp.69-117)に掲載されている。
- (5) 寺島俊雄「神戸病院初代病院頭アレキサンダー・ベッターに関する新事実」。
- (6) *Cincinnati Daily Gazette* (オハイオ州) 1870年8月20日に、神奈川在住のヴァン・リードが東部に向かっていると書かれている。SFにしばらく滞在した後、東部に向かったようだ。日本人が同行しているという記述は無い。ヴァン・リードに関しては、後出の注(42)参照。
- (7) 加納重朗「田村初太郎について——未発表「履歴」より——」, pp.66-67。インターネット上、国会図書館等では入手できない貴重な史料である。平安女学院の校史編纂のためのメモ等の『田村初太郎略歴』が、ほぼそのまま紹介されている。内容は一次史料の価値がある。
- (8) 高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』pp.172-173。
- (9) ヘンリー・スタウト(1838-1912)は、妻のエリザベスとともに、オランダ改革派教会の宣教師として派遣され、1869年3月に長崎に来た。フルベッキはその直後、東京に招聘され、スタウトはフルベッキの後継者として長崎の広運館で英語を教えた。折田、服部、山本も、スタウト訪日以前は、フルベッキに学んだことがあった。
- 森川潤「青木周蔵の渡独前の修学歴(4)——長崎遊学時代 その二 修学——」によると、山本等長州藩士は、1867年5月頃から長崎での自費留学が許されたが、公の場で教育を受けることができず、薩摩藩邸にかくまわれて、フルベッキや阿波藩士芳川顕正から英語を学んだ。
- 小川亜弥子「幕末期長州藩の洋学と海外留学生」(pp.192-193)によると、慶應三年に長州藩では海外留学の希望者が急増した。長崎で海外留学の機会をうかがっていた長州藩士として、山本の名前が挙がっているが、服部の名前は見当たらない。
- 服部、山本に関しては、長州藩士の当時の長崎での立場を意識して、フルベッキは自分の弟子として書かなかったのかもしれないが、薩摩藩出身の折田に関しては説明が付かない。フルベッキは、多くの日本人生徒を教えていたので、個人情報混乱していたこともありうる。二次史料ではあるが、スタウトから英語を学んだ日本人として、黒木五郎編『梅光女学院史』は、大隈重信と服部を挙げている(p.62)。スタウトに関しては、G・D・レーマン著峠口新訳『ヘンリー・スタウトの生涯』を参照した。
- 米国留学生の留学前の英語力を知るために、幕末・明治初年、長崎で英語を「誰が」「誰に(フルベッキ、スタウト、何礼之等)」「どこで」「どれくらいの期間」「何を」学んだかという情報が必要である。
- (10) 厳平『三高の見果てぬ夢』では、5人の中では、山本と服部が英語力で秀でていたと推測している(p.23)。
- (11) 高橋秀悦『海舟日記に見る幕末維新のアメリカ留学—日銀総裁富田鐵之助のアメリカ体験』p.204参照。厳は、折田の海外留学願望に岩倉具視が共鳴し、具定と具経2人を折田に託して長崎に送ったという説を紹介している(厳, p19)。西村文則『岩倉具定公伝』(p.106)によると、父具視は、具定には法律制度、具経は海軍について学ぶよう指示していた。
- 岩倉兄弟の帰国後に関しては、以下の通り。

- ・具定：1874年帰国後内務省地理局出仕。1882年伊藤博文の憲法調査に随行して欧州に渡る。1884年家督を継ぎ公爵。帝室制度取調委員、貴族院議員、学習院長を

歴任。1900年枢密顧問官、1909年宮内大臣となる。(https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/22.html?cat=30 2021年10月24日最終閲覧)

- ・具経：1878年太政官権少書記官・法制局専務となる。以後、兼大蔵権少書記官、大蔵権少書記官兼太政官権少書記官などを歴任。1884年男爵を叙爵。同年9月、外務書記官に転じロシア公使館で勤務した。帰国して1890年3月宮中顧問官に就任したが、同年10月に病のため死去。具経のイギリス留学に関する詳細な情報は未見である。(https://www.weblio.jp/wkpja/content/%e5%b2%a9%e5%80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c\_%e5%b2%a9%e5%80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c%e3%81%ae%e6%a6%81 2021年10月24日最終閲覧)

- (12) 前出、巖、p. 33。
- (13) 塩崎智 (2019) 「1870年に実施された米国情勢調査 (Census) —— 日本人留学生情報の分析 ——」 (p. 67)。具経は国勢調査結果に名前が出ていない。兄弟は常に行動を共にしていたわけではないようだ。
- (14) ラトガーズ大学アレグザンダー図書館所蔵のグリフィス・コレクションに納められている。
- (15) 留学2年目の日本人留学生の英語力を現した例として【英文資料1】に掲載した。プライベートな手紙で、末尾に書いてあるように、米国人の英文チェックは入っていない。ラトガーズ大学の University Archives, George Washington Atherton Papers に納められている。アサートン教授の1870年前後の日記や書簡が、ペンシルヴェニア州立大学の図書館に所蔵されている。岩倉具定を始め日本人留学生からの書簡、日本人留学生の情報などが発見できるかもしれない。
- (16) ラトガーズ大学アレグザンダー図書館がマイクロフィルムで所蔵している。
- (17) 巖『三校の見果てぬ夢』と、板倉創造『一枚の肖像画 —— 折田彦市先生の研究 ——』。後者は、特に日本人留学生との交流に関する記述が詳細である。高橋秀悦『海舟日記に見る幕末維新のアメリカ留学』の第3章「ニュージャージー州ミルストーン」(pp. 155-184)も参照。
- (18) コーウィンに関しては、前出、高橋の第3章3節コーウィン牧師 (pp. 164-169) に詳しい。前出、巖、p. 76の注(21)も参照。
- (19) 服部翁顕彰会編『服部一三翁景傳』(服部翁顕彰会、1943年)。服部の留学を扱った論文、著作は見当たらない。

服部の帰国後の経歴は以下を参照。https://kotobank.jp/word/%E6%9C%8D%E9%83%A8%20%E4%B8%80%E4%B8%89-1652624 (2021年10月26日最終閲覧)

服部の経歴からは理系学部卒業生らしさを感じられないが、地震に興味を持ち、1880年日本地震学会の初代会長を務めた。

伏谷聡「知事服部一三とその史料」によると、2007年1月に服部の子孫から兵庫県公館県政資料館へ史料を寄付する申し出があった。この中に書簡が336点含まれている。服部の米国留学中の書簡は13点で養父の名和緩関連の書簡が11点を占めるという。前出の『服部一三翁景傳』には、名和発の書簡が6点掲載されている。両者が重なっているか否かを明らかにする必要がある。
- (20) 原保太郎は、ラトガーズ大学科学学部に1873年入学しているが、それまでどこで学んでいたかは不明。
- (21) 以前、ラトガーズ大学アレグザンダー大学の司書の方からコピーを頂いた。Marilyn Bandera, *Case Study in Educational Motivation: Ryugakusei and Rutgers College 1866-1895*, 1970 April。

1870年代の米国大学におけるフラタナティ活動については調査が必要である。ラトガーズ大学科学学部の最終学年で病死した、越前藩出身の日下部太郎 (1845-1870) は成績優秀

- で、病死後、日本人学生としては初めて Phi Beta Kappa に推薦され、黄金の鍵を授けられた。
- (22) 吉田清成関係文書研究会編・解説『吉田清成関係文書四』p.442。田中智子のまとめ（「幕末維新期のアメリカ留学——吉田清成を中心に——」）によると吉田の米国留學生活は以下の通りである。吉田は1868年9月ラトガーズ大学科学学部に入學し、1869年7月にマサチューセッツ州のウィルブラハム・アカデミー（Wilbraham Academy）に移った。大学から私立アカデミーに移る例は稀有である。1870年2月にはコネチカット州ミドルタウン（Middletown）に引っ越しウエズレイヤン大学（Wesleyan University）に入學した。服部がNBに来た時には、吉田もまだ大学生だった。1870年6月には、外務省から手当をもらい、在米官費留學生の学資配達を命じられるなど、米国東部で学んでいた日本人留學生のまとめ役といった存在だった。
- 1870年秋には、上野景範にその能力を買われてイギリスへの出張に同行し、吉田の米国留學生活が終わった。1874年には米国駐在日本全權公使として首都ワシントンで公務に就くことになる。
- (23) 山本の米国から英国留學への変更を示唆する情報としては、『幕末明治期海外渡航者人物情報事典』があり、山本の留學先は米国と英国となっている。前出、巖、p.34で、岩倉使節団に随從して英国で鉄道について研究することになった、と書かれている。これらの根拠は服部の伝記に収録されている「外遊日記」の日付のない「後期」と記された「此の頃、河本氏欧州より来り、山本十助氏、大使と共に渡欧、又国司氏米州を去る」という1文（p.295）だと思われる。
- (24) Edward J. M. Rhoads, *Stepping Forth into the World. The Chinese Educational Mission to the United States, 1872-81* (Hong Kong University Press, 2011)
- (25) 前出、板倉、p.120。
- (26) ラトガーズ大学アレグザンダー図書館所蔵。タイプ打ちの書簡が保存されている。
- (27) 日本史籍協会編『木戸孝允日記 二』p.201。明治五年五月十五日に「山本重助尋来る」とある。英国から来た友人とは、4日前にイギリスから到着した、長州藩出身の河北俊弼（義次郎、1844-1891）と尾崎三良（戸田三郎、1842-1918）の可能性が高い。
- (28) 同上、p.266。明治五年十月二十八日に記載。
- (29) 加納重朗「田村初太郎について——未発表「略歴」より——」の内容は、沼津市明治史料館編『神に仕えたサムライたち 静岡移住旧幕臣とキリスト教』pp.35-38に掲載された、菊池三男氏所蔵の『田村初太郎履歴』とほぼ同じであるが、異なる箇所もある。これらの史料の内容は、いずれ精査する必要がある。
- (30) 前出、加納、p.66。
- (31) 高橋是清、上塚司編『高橋是清自伝（上）』pp.46-47。
- (32) 前出、加納、p.68。栗原安次郎という使節団員の確認ができていない。
- (33) Michael Duck, *The Story Beneath The Ruins A History of St. Mary's College in Ilchester Part I: From Tavern to Seminary*, 2000 <http://ann.stubbornlights.org/stmarys/story1.html> (2021年10月20日閲覧)
- まだ洗礼を受けていないが、プロテスタントの環境で育った田村が、カトリックの神学校で教壇に立つことになった経緯は興味深い。
- (34) 堀井令以知「ラテン語教育の先駆者——田村初太郎のこと」。
- (35) 前出、加納、p.67。留學生では、イギリスに1868年に留學した三条公恭しか、三条という名前は見当たらない。
- (36) 齋藤知明「明治二〇年代の教育言説と「宗教的情操」：能勢栄を中心に」、pp.408-409。
- (37) 秋山ひさ「外山正一とミシガン大学」p.17、注26。ミシガン大学の明治期日本人留學生

- に関しては、田中康子「ミシガン大学幕末・明治の留学生 72 人」も参照した。
- (38) 吉田清成関係文書研究会編『吉田清成関係文書二 書翰篇 2』p. 191。
- (39) 栗原＝高木に関しては、一時帰国後の再渡米の件を、拙稿で採り上げた。塩崎智 (2020) pp. 94-95。
- (40) 海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』史・資料, pp. 110。
- (41) 桑名史上の人たち(8) — 高木貞作 (たかぎ ていさく) — <http://www.city.kuwana.lg.jp/index.cfm/24,11184,234,407,html> (最終閲覧 2021 年 10 月 20 日)。
- (42) 前出, 海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』pp. 27-41。ヴァン・リードに関しては、様々な論考が発表されてきたが、菅美弥がこれまでの経緯を整理してまとめ、客観的、公平な評価が述べられている。ハインリッヒ・シュネルとヴァン・リードの「避難民送り出し」プロジェクトの発想は興味深く、歴史的にもより詳細に検証されるべきである。ヴァン・リードは幕府海軍を率いて北海道に向かった榎本武揚にもハワイへの「亡命」を勧めていた。『萬國新聞』の公告の件は、同書所収の小澤智子「第二章 新聞報道にみる初期の移動—横浜からハワイ・サンフランシスコへ」pp. 76-77 を参照。
- (43) 瀬戸口龍一「永井久一郎と専修大学創立者たち：「禾原先生遊学日誌」からみるアメリカ留学生の実態について」p. 71。
- (44) 多藝と西川と黒田の関係については、海外移住 150 周年研究プロジェクト編『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』pp. 140-143 参照。故團男爵傳記編纂委員会編『男爵団琢磨傳 上』p. 66 で、団は「多藝と云う人は実に立派な人で御一新の前に人を斬って大に乱暴して逃げ出して来た人だ」と記している。団は帰国後、しばらく経ってから多藝と知らず山脇に再会した。
- (45) 塩崎 (2020) 参照。
- (46) 大内兵衛・土屋喬雄編『明治期財政経済史料集成』10 巻, pp. 268-269。
- (47) 会津藩士石澤源四郎に関しては、史料が集まり次第、SF 在住留学生に関する論考で採り上げる予定である。
- (48) 彦根藩井伊直憲一行は、1872 年末、SF 到着時、案内してくれた高木源次 (出身不明) に「挨拶」として 50 円を与えた。鈴木栄樹氏からの個人的史料提供「井伊直憲洋行日誌」による。
- (49) 前出, 秋山ひさ, 参照。例えば、小野寺香月, 神戸大学博士論文, 2018 年「近代日本重工業における経営問題の相克と克服 — 組織内部の意思決定分析から —」に次のように書かれている。

「敗戦後、山脇は高木と共に岩倉使節団随員の留学生となり, 1870 年からアメリカに留学した。彼らが留学した理由は、家老を暗殺した者を国内に置くことが憚られたためといわれている。山脇が留学で何を学んだのかは不明であるが、高木がのちに商法講習所 (現一橋大学) に勤め会計の教科書を著していることから、商業に関するものと推察される。」(下線筆者)

論文の大筋には影響が無いと思われるが、下線部分は、修正が必要であろう。

- (50) 注(45)参照。
- (51) 瀬戸口龍一翻刻・解説「松本壮一郎「亜行日記」」p. 103。
- (52) 鈴木栄樹「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学 — 大名華族の西洋体験 —」p. 232。
- (53) 瀬戸口龍一「永井久一郎と専修大学の創立者たち」p. 71。
- (54) 前出, 鈴木, pp. 213-214。

- (55) 諸史料によると、SF市内のシティカレッジ (City College) という大学に通っていた日本人留学生が多かったようだ。高橋是清、上塚司編『高橋是清自伝 (上)』p. 43 にシティカレッジで学んでいる金子という日本人が登場している。この彦根藩2名のもう1人は、武藤精一で、当初はSFで牧畜を学んでいた。後にニューヨーク州のユティカで工場実地研修を受けた。渡英する予定だったが、結局米国に留まり、1873年に米国で亡くなった。彦根市編集委員会編『新修彦根市史 第8巻 史料編近代1』pp. 723-724 参照。

## 参考文献

### ●「基調論文」

- 伊藤久子「解説」(『復刻版ジャパン・ウィークリー・メール 第1期 第3回配本:1880-1884 別冊付録』, エディション・シナプス, 2007年) pp. 5-14。  
塩崎智「1872年3月26日横浜発サンフランシスコ行き、アメリカ号日本人渡航者の調査——先行研究発表後四半世紀の関連研究成果のまとめ——」(『拓殖大学論集 人文・自然・科学研究』44号, 2020年10月) pp. 75-107。  
同「横浜発サンフランシスコ行直行便の日本人船客リスト (1868年と1869年)——日米両史料を活用した試み——」(『拓殖大学論集 人文・自然・科学研究』45号, 2021年3月) pp. 97-122。  
西岡淑雄「太平洋郵船と英学史」(『英学史研究』25号, 1992年) pp. 87-101。  
同「明治五年二月十八日横浜発のアメリカ号で渡航した留学生たち」(『英学史研究』26号, 1993年) pp. 159-172。

### ●「資料集」

- 大内兵衛・土屋喬雄編『明治期財政経済史料集成』10巻 (改造社, 1935年)。  
海外移住150周年研究プロジェクト編『遙かなる「ワカマツ・コロニー——トランスパシフィックな移動と記憶の形成』(彩流社, 2019年)。  
高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』(新教出版社, 1978年)。  
手塚晃, 石島利男共編『幕末明治期海外渡航者人物情報事典』(雄松堂書店, 2003年)  
日本史籍協会編『木戸孝允日記 二』(東京大学出版会, 1967年)。  
彦根市編集委員会編『新修彦根市史 第8巻 史料編近代1』(滋賀県彦根市, 2003年)。  
吉田清成関係文書研究会編『吉田清成関係文書二 書翰篇2』(思文閣出版, 1997年)。

### ●その他の日本語文献、資料

- 秋山ひさ「外山正一のミシガン大学」(『神戸女学院大学論集』29巻1号, 1982年7月) pp. 1-18。  
小川亜弥子「幕末長州藩の洋学と海外留学生」(『洋学』27号, 2020年) pp. 177-213。  
大久保利謙「幕末の長崎と上野景範——長崎とサツマの英学文化交渉史断片——」(『大久保利謙 歴史著作集5 幕末維新の洋学』(吉川弘文館, オンデマンド版, 2007年, pp. 317-343)。  
加納重朗「田村初太郎について——未発表「略歴」より——」(『平安女学院短期大学 のぞみ』19号, 1977年2月) pp. 65-73。  
黒木五郎 (編)『梅光女学院史』(下関梅光女学院, 1934年)。  
齋藤 知明「明治二〇年代の教育言説と「宗教的情操」: 能勢栄を中心に」(『宗教研究』89巻別冊, 第十三部会, 研究報告, 〈特集〉第74回学術大会紀要, 2016年) pp. 408-409。  
塩崎智「1870年に実施された米国情勢調査 (Census)——日本人留学生情報の分析——」(『拓殖大学論集 人文・自然・科学研究』41号, 2019年3月) pp. 60-93。  
鈴木栄樹「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学——一大名華族の西洋体験——」(佐々木克編

- 『幕末維新の彦根藩』彦根市教育委員会，2001年）pp.209-240。
- 瀬戸口龍一翻刻・解説「松本壮一郎「亜行日記」」（『専修大学史紀要』2号，2010年3月）pp.90-110。
- 瀬戸口龍一「永井久一郎と専修大学創立者たち：「禾原先生遊学日誌」からみるアメリカ留学生の実態について」（『専修大学史紀要』3号，2011年3月）pp.55-79。
- 高橋是清，上塚司編『高橋是清自伝（上）』（中公文庫，1976年）。
- 田中智子「幕末維新期のアメリカ留学——吉田清成を中心に——」（山本四郎編『日本近代国家の形成と展開』吉川弘文館，1996年）pp.2-36。
- 田中康子「ミシガン大学幕末・明治の留学生72人」（『知識』2号，1990年）pp.162-169。
- 故團男爵傳記編纂委員会『男爵団琢磨傳 上』（故團男爵傳記編纂委員会，1938年）。
- 妻木忠太『史実参照木戸松菊公逸話』（有朋堂書店，1935年）。
- 寺島俊雄「神戸病院初代病院頭アレキサンダー・ベッダーに関する新事実」（『神緑会ニュースレター』7巻4号，2016年3月）pp.17-24。
- 西村文則『岩倉具定公伝』（北海出版社，1943年）。
- 沼津市明治史料館編『神に仕えたサムライたち 静岡移住旧幕臣とキリスト教』（沼津市明治史料館，1997年）。
- 伏谷聡「知事服部一三とその史料——兵庫県公館県政資料館所蔵の服部一三知事関係資料について——」（『新兵庫県の歴史』1号，2009年3月）pp.55-67。
- 堀井令以知「ラテン語教育の先駆者——田村初太郎のこと」（大修館書店『言語』1号，1983年7月）pp.30-33。
- 森川潤「青木周蔵の渡独前の修学歴（4）——長崎遊学時代 その二 修学——」（『広島修大論集』57巻1号，2016年）pp.1-28。
- 嚴平（Yan Ping）『三高の見果てぬ夢—中等・高等教育成立過程と折田彦市』（思文閣出版，2008年）。
- 吉原重和「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」（『新島研究』104号，2013年2月）pp.3-31。
- 吉元正幸「上野景範渡米日記」（『研究年報』14号，1985年）pp.37-47。
- G・D・レーマン著，峠口新訳『ヘンリー・スタウトの生涯』（新教出版社，1991年）。

#### ●英語文献・資料

- Marilyn Bandera, *Case Study in Educational Motivation: Ryugakusei and Rutgers College 1866-1895*. (In Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree Master of Arts, presented to the Faculty of the Department of History University of Hawaii, 1970 April 24)
- Edward J. M. Rhoads, *Stepping Forth into the World. The Chinese Educational Mission to the United States, 1872-81*. (Hong Kong University Press, 2011)

#### ●インターネット上で入手した情報

岩倉具定

<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/22.html?cat=30> 2021年10月24日最終閲覧

岩倉具経

[https://www.weblio.jp/wkpja/content/%e5%b2%a9%e5%80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c\\_%e5%b2%a9%e5%80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c%e3%81%ae%e6%a6%82%e8%a6%81](https://www.weblio.jp/wkpja/content/%e5%b2%a9%e5%80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c_%e5%b2%a9%e5%80%89%e5%85%b7%e7%b5%8c%e3%81%ae%e6%a6%82%e8%a6%81) 2021年10月24日最終閲覧

歴史街道編集部『「致遠館と弘道館～岩倉具視が息子を託した佐賀の藩校」』『WEB 歴史街道』

(2018年7月11日公開, <https://shuchi.php.co.jp/rekishikaido/detail/5230>, 2021年9月19日最終参照)

栗原貞作 桑名史上の人たち(8) — 高木貞作(たかぎ ていさく) —

<http://www.city.kuwana.lg.jp/index.cfm/24,11184,234,407,html> (2021年10月20日最終閲覧)。

Michael Duck, *The Story Beneath The Ruins A History of St. Mary's College in Ilchester Part I: From Tavern to Seminary*, 2000

<http://ann.stubbornlights.org/stmarys/story1.html> (2021年10月20日最終閲覧)

#### 《英文史料》

【英文史料1】(抄訳は著者による。明らかなスペルミスも修正せずに掲載した。)

岩倉具定からラトガーズ大学 Prof. Atherton への手紙。具定は首都ワシントンで1通(4月3日), SFで1通(5月3日), アサートン教授に手紙を書いている。これは帰国前の3通目である。

San Francisco Cal.

May 13th 1872

Dear Sir

I have written a letter to you about a week ago, I expect you have received it by this time. I wrote in a letter that I was very sick for sometime; but now I am quite recovered and am all ready to go to Japan. The steamer sails from here on the 16th of May, so that, I have only a few days to stay here. Although I am very glad to leave here, I like to stay in the eastern states very much; but not here, the climate is very good and my health is getting better. But I do not wish to stay here very long. I suppose, my father will be in New York by this time, I hope then you will see him and hope to tell what I was doing in your house. I want to get back to N.Brunswick very much. I am very homesick, to see N.B. I suppose this letter will be last to you in this country for w better while. Please give my best regards to Mrs. Atherton and give my love to Mr. Frankee.

I am your friend K. Aashi

I hope you will excuse my writing, I suppose all not correct writing.

一週間ほど前に手紙をあなた様を書いて御送りしました。もうお手元に届いていることと存じます。その手紙では、自分の具合が大変悪かったと伝えましたが、今はもうすっかり良くなり日本に出航できる状況です。船の出航は5月16日ですので、ここで過ごせる日は、もう数日しかありません。ここを離れるのは嬉しいのですが、東部の州で生活したい思いが強いです。ここは、気候もよく健康もよくなりましたが、ここに長く住みたいとは思いません。もうそろそろ父はNYに到着しているでしょう。どうか父に会い、私があなた様の家でどのように過ごしていたかお伝えください。NBに戻りたいという想いで一杯です。NBを一目見たくてホームシックになっています。この手紙が米国であなた様に出す最後の手紙となるでしょう。どうぞ奥様とフランキーによりしくお伝え下さい。

英語での乱筆お許しください。間違いが散見されると思いますが。

【英文史料 2】（抄訳は著者による）

木戸孝允が岩倉使節団の副使として渡米した際（1872年）、長州藩留学生の服部や山本は木戸を度々訪問している。妻木忠太『史実参照木戸松菊公逸話』（pp.435-435）によると、木戸は服部等に、漸進主義の重要性を語ったという。日本の進歩は急激であってはならず、確実に一步一步進んでいくことが大事だと語り、当時の森有礼や伊藤博文の急進的考えを批判した。この英文には、木戸が主張する漸進主義と共通点を感じられる。木戸の影響を受けて服部が法制度の自然な発生という考え方に発展させたとも考えられる。木戸が1873年7月に率先して憲法の制定を建議した（p.439）ということも覚えておいてよい。服部を始めとする長州藩留学生と木戸との関係は、今後の研究課題の一つである。

Constitutions are not made, but grow

*Targum, March, 1873*

It is often said in this country, that the present progress of Japan is entirely unnatural, and that the maxim "Constitutions are not made, but grow," is utterly ignored by that nation.

米国で、よく次のように言われる。日本の発展は西洋の基準から外れている。一国の法制度というものは、その場その場で作られるものではなく、それまでの伝統が法制度へと自然にまとめられるという原理が日本では全く無視されている。

For Japan had preserved an entire seclusion from the other world for so long time that we Japanese seemed, as the critics say, to utterly ignore the golden maxim of Sir James Mackintosh; but fortunately, as early as 283 A. D., we had diligently studied the book of the great philosopher, Moshi, who told us, that to improve a national affair too fast is as foolish as to pull out the stem of a plant to make it grow faster; and we admire his saying as much as you do Mackintosh's. Although the great changes going on at present in Japan are made by order of the government, and seem to the critics artificial, yet if they are made peacefully and permanently, I think that they are not artificial, but a natural growth, for "the true sources of such changes lie deeper than the acts of legislators." What are the true sources of these changes, if not the acts of the legislators?

日本は長い間鎖国していたので、ジェームズ・マッキントッシュの有名なこの格言は当てはまらないと思われるのかもしれないが、実は日本は西暦283年という早い時期に、中国の偉大な思想家孟子の本を熱心に研究し、急激な変化は、成長を促すために植物の茎を引っっこ抜くようなもので、成長を阻害するということを承知している。日本人にとっては、孟子は欧米でのマッキントッシュに引けを取らないくらい賞賛されている。確かに、今、日本では次々に大変化が政府の命令により起こっていて、それは人為的なものと批判する人もいる。それが問題を引き起こさずにそして永続的に起こるのであれば、それは人為的なものではなく自然発生的と言えるのではないか。日本の劇的な変化は単に議会で決められているのではなく、もっと深いものに根ざしているのではないか。では、これらの変化を起こしているものは何だろうか。

There are two sources, namely: the "Yamato-Damashi," (Japanese spirit), and our first attention to material progress above all others. I think nothing can characterize the Japanese more distinctly than the Yamato-Damashi, which is nothing but their patriotic spirit. Those, and only those, who are familiar with Japanese literature, especially that of the

modern time, can realize how much this feeling has influenced the national progress. It was this spirit that brought the first Japanese students to Europe, which was in their imagination at that time situated almost beyond this world. They undertook this expedition, not by the order of the government or their parents, not for the ambition of wealth or fame, but under the guidance of patriotic spirit, to search something which could be brought back to promote their national affairs. It was also with this spirit that we accomplished the sudden but peaceful destruction of our feudal system. As soon as the Taicoon was overthrown in the year of 1868, by the combined powers of the Daimios, four of them agreed among one another that to strengthen Japan the feudal system must be destroyed, and the powers, military and civil, must be concentrated into the central government; and in the year 1869, they addressed to the Mikado a letter, offering to resign their extensive territories, and enormous wealth, (their revenues varied from £769,728 to £6,400) and before the end of the year all Daimios, without a single exception, followed the noble example of their colleagues.

それは二つ考えられる。一つは「大和魂」と呼ばれる日本人独特の気魄であり、もう一つは他の何にも勝る物質面での進歩への関心である。「大和魂」以上に、日本人の愛国的心情を明確に表している言葉はない。「大和魂」の日本の進歩に対する影響力については、日本の近年の著述を読まないことには理解できないだろう。この「大和魂」に突き動かされて、最初の日本人留学生たちは、想像を超えた遥か遠い世界であるヨーロッパへ向かったのだ。彼らは誰の命令に従った訳でもないし、どんな物欲、名誉欲に背中を押された訳でもない。ただ、日本の進歩を後押しするものを持ち帰らんがために、「大和魂」が命じるままに留学したのだ。封建制度の廃止は突然だったが、それも混乱なく達成されたのは「大和魂」の成せる技である。諸大名の協力により、1868年に将軍政権が打ち倒されると、4人の大名が封建制度を廃止し、政府、軍隊、市民がまとめて中央政権を設立することに同意した。そして1869年には天皇にその広大な保有地と莫大な富を手放すよう書簡で求めた。その結果、その年のうちに全ての大名が、天皇が示した例に従ったのである。

There are a great many examples like these, but while I am boasting of this faithful national spirit, I am sorry to say that the ghost of liberty or freedom of the western nations has already scattered many germs of faithlessness upon our loving country.

この誇るべき「大和魂」の影響は、他にも数えきれないほどの例があるが、残念なことに、西洋の自由という「幽霊」が、この愛すべき国、日本に広がりつつあり悪影響を及ぼしつつある。

The second source is our first attention to the material progress above all others. Before the year 1854, when the American fleet under the command of Commodore Perry forced into the bay of Yedo, the western civilization was unknown to us, and our attention was then first attracted by the strong steam-vessels, and the good discipline of their marines and sailors; and the result was the introduction of steam-power and the military and naval science of the west. These, of course, soon brought us into contact with other new facts, and these again excited our further curiosity, and each step demanding its next step we have arrived at the present state; and as when we first started there were only a few narrow passages, now these being branched again and again we are going in almost every direction. A reverend gentleman said in the pulpit lately, that by this way Japan is

actually becoming a nation of materialists or sophists. But I do deny this, because we are actually tracing down from the fruits to the branches to the trunk, thence to the root. By this method we can reach, sooner or later, at the true root of human civilization, whatever it may be, without any great mistake. In conclusion, I say that, although Japan commits many petty mistakes, the main road she takes is the safest and shortest, and her constitution has been growing peacefully and will continue so forever.

日本の変化を引き起こしているもう一つの内的要因は物質面での進歩を最優先するという姿勢である。ペリー提督に率いられた米国艦隊が1854年に江戸湾に侵入する前、西洋文明は、日本人にはほとんど知られておらず、日本人の関心は、強大な蒸気船やよく訓練された水兵の規律に向けられていた。その流れで、蒸気船と西洋流の海軍、陸軍制度が導入された。しかし、西洋への関心はここに留まらず、日本人の好奇心を更に刺激し、その連続と発展が、現在の日本を生み出したのである。最初は限られていた変化がどんどん枝分かれしてあらゆる分野に広がっていった。最近、ある牧師が教会で、こうして日本は実利主義者か、さもなければ好ましからぬ理屈家になりつつあると語った。しかし、自分は大いにこの説に異を唱えたい。我々は果実から枝、そして幹、そして最終的には根へと辿りつつある。この方法により、我々は、どんな文明であれ、その蘊奥を間違いなく究めることができる。結論として言うと、些細な間違いは多々あるものの、日本が進んでいる道は、最も安全な近道なのだ。そして日本の法制度はここまで順調に成長してきており、さらに同じように永遠に成長し続けるだろう。

(原稿受付 2021年10月27日)